
8-

神代翁

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

8 -

【Nコード】

N4574Z

【作者名】

神代翁

【あらすじ】

20年前、怪と呼称される化物が現れた。

最初は、特段危機を感じる程の能力を持たなかった彼らは、時と共に、あるいは外的刺激と共に変化反応——進化し、やがて戦場は泥沼化を始めた。

相手が学習する所為で強力な兵装を使えば使うほど、己の首を絞める結果となる。

何処から来るかわからず、どれだけの数がいるかもわからない。

何も得ることのない戦争に疲れた人類は、人間兵器の作成使用に踏み切った――

プロローグ

プロローグ

鉄格子の嵌められた窓から、五月の暖かな陽光が差し込んでいる。灰色を基調とした取り調べ室じみた部屋で僕は椅子に座らされ、目の前に座る男と話していた。

「まずは、おめでとうと言わせてもらおう」

カマキリみたいな細顔に銀縁フレームの眼鏡。度が強いせいで目が大きく見えて、そこもまたカマキリっぽい。実物は見た事がないけど。スーツの色がダークグレーじゃなく緑色だったら完璧だったのに。

カマキリ男改め三笠寛人一佐が僕の目を真っ直ぐ見つめながら口を開く。

「最終プログラムに残った17組の被験体の中から君たち——和人で、あつてるかね？ ああ、そうそう。苗字は弘中が支給されるから、以後それを名乗る様に」

頷きを返す僕に三笠一佐は手元の資料を捲りながら言葉を紡いでいく。

「他のプランは君たちのところのように時間通りに完成しなかったようだね。君が編入後、一体が追加される以外は暫くこないようだ。接続骨子の調子はどうかね？ 頷くのではなく」

「大丈夫だと思います」

「ふむ。君の場合は脳とその繋がりが要だからな。まあ、検査結果も良好だ。活躍を期待している。では、君が現状を正しく確認しているかを確認させてくれ」

「了解。——現在、日本国及び世界の国々には幽霊が「日本での名称は怪だ」了解。怪が多数出没しており、怪がどこからくるのか、また突然現れる特徴からどういった移動手段ないしは物質構成力を

持っているか現在調査中。大きくわけて怪には三種あり、脊椎動物を象った骨型、昆虫に類する外形能力を持つ蟲型、主に意志ある無機物として行動する無形型、の三種です。「無形型の所以は？」霧状や霞状になってリーダー機器の破壊、及びこちら側の錯乱に努めるからです。また、非常にレアなケースではありますが富士山脈における金属壁状防壁などの形も確認されており、一重にコレだ、という共通項がないためです」

そこまで話した僕を、腕を振って止め、三笠一佐が付け加えるように言う。

「君の、君たちの行動意義が変更されている事は担当官から報告されているか？」

「はい。本来の製造目的は人類に代わって怪との戦闘を引き受ける事でしたが、目標数が揃わなかった為、目的を修正して、出来る限り人類側の損害を軽微にすること」

「そうだ。そしてこの決定に対して陸軍内部で決定があった。君が戦場に出ている時に、上から階級順に二名が死亡しないしは指揮不能に陥った場合、君の階級は陸曹スタートだが、階級と関係なしに君に指揮権がうつる。つまり、君たちが稼働するのは上位二官が死亡しないしは行動不能に陥った場合だ。了解したか？」

「了解」

「では解散。以後は真田三尉が引き継ぐ」

三笠一佐の敬礼に僕も敬礼を返し、三笠一佐の右後ろに控えていた真田三尉の後に続いて部屋を出る。無機質な廊下をコツカツと足音を立てながら歩いて行く。先は陽光の差し込む方向であるのに、見通せない程の闇を感じるのは何故だろうか？

三笠寛人は弘中和人のカルテをパラパラと捲っていた。総合成績は甲の最高値だが、三笠は彼よりも上がいた事を知っている。そのペアはグリングと呼ばれ、17組中最も期待されていたペアだったが、最後の接続骨子の調整に失敗して脳が焼き切れてしまった為

繰り上げで弘中和人が最前線に投入される運びとなった。

三笠は思う。

今現在、人間は倫理観の限界地点に来ていると。弘中和人たち実験体は人工子宮で生まれた設計子供だが、人と同じ遺伝子を持ちながら人として見なされないのは何故だろうか？ 生を与えられ、性を与えられ、人の為に、人と似た機械として死んでいく。

三笠は思う。

我々は何処かで、間違つてはならない道を間違つてしまったのではないかと。

だが、怪との戦闘は20年間続いている。全人類の四分の一、耕作可能地の四割が失われた。これから先、世界では慢性的な飢餓が輪をかけて酷くなるだろう。コレ以上人類を減らすわけにもいかず、さらには迅速に耕作地を取り戻す必要がある。だから、間違つていようとも進む必要性がある。そう重い息を腹に沈めながら自分を納得させる。

弘中和人のカルテを捲っていると興味深い説明を見つけた。思わず頬がほころぶ。

『逢いたくて』

彼はそう答えたのか。なるほど。奇知外に知識と能力を与えれば、現在の状況に風穴が空くとしても？ 研究者も行きずまってきているのか。カルテの続きには万が一彼が暴走した際に止める手段が七ペーじに渡って書き込まれていた。

「逢いたくて、か」

基地司令部のどこかで、重々しい排気音が唸りを上げ、やがて遠ざかっていく。

三笠はカルテの中から彼の精神状態に関して書かれたページから何枚かを抜き取り、そしらぬふりをしてカルテを所定の位置に戻しに行った。

能力値的には問題ない。

お前が世界を変えられるか、見ていてやるよ。

プロローグ（後書き）

自分何が出来るんだろう、という事でアクション系を試してみます。
付き合って頂けるなら幸い、叩いてくれるなら僥倖、感想がくるな
ら五体投地して床を舐めますw

所在 一

所在

弘中和人が軍用車両に乗せられて連れてこられたのは、富士の山が見える基地。20年前に始まった戦いの最中、もともとも早く増設された基地である富士宮基地だった。怪は人の多い方向に移動する習性があり、日本の怪が主に発生するのは富士周辺であることから、富士山を囲むようにして基地あるいは塹壕が築かれている。

だが、20年間人類の全勝だった訳ではない。初めて無形の怪が確認された時、全体の八割の無線及び赤外線探知機が動作不能になり、果てには霧に包まれて衛星さえも使えなくなった。現場の兵士に何が起こってるかがわからないままに、気付いたら東京に怪の大部隊がいた。7万人の死亡が確認され40万人は以前行方不明扱いとなっている。第一次東京怪災と呼ばれる怪災である。第一次では東京に居座る人も600万人はいたといわれるが、居座らざるを得なかったのかもしれないが、第二次第三次と起きた怪災によって全員の心が折れるか、死亡するかした。以後怪の一団は名古屋、大阪と狙いを変えていき、20年経った今では富士山から半径200キロメートル圏内にいる人間は軍関係者だけとなっている。

真田三尉は何も話さず前を歩いて行く。富士宮基地の中は誰もいないかのようにシンとしていたが、時折誰かの視線を感じて振り返るとそこには富士宮基地の兵士たちがいて、興味深そうに、あるいは気味悪そうに僕の事を見ている。

やがて、僕に与えられる部屋についたらしく、真田三尉が「入れ」と低い声で言った。声に従って部屋に入ると、四畳程の空間に二段ベッドが一つ、僕の背丈ほどある緑色のロッカーが二つあるだけの窓さえない部屋だった。洋式のトイレがとってつけたように壁際に鎮座している。

「現在時刻は14:37。夕食は18:00からだ。それまでこの

部屋にて待機」

了解、と返すと真田三尉は部屋を出、扉に鍵を掛けて行ってしまった。外からは鍵が掛けられるのに、中からは掛けられないという囚人部屋のような設計。窓がないのも逃走等を警戒しての事かもしれない。

——逃げるわけないのに。

そういう風に作られたんだから。嘆息しながら並んでいるロッカーの右側を開ける。迷彩服が上下二着ずつ、それから白いＴシャツが二枚に、トランク스가二枚。無機質な鉄の箱が一つ。

箱は長方形をしていて、全長約15？、全幅20？、厚さは5？、重さは3キロ。箱の側面から何かのコードが伸びている。端子は通常の家庭機器にはあり得ない程太く、赤い色をしていた。床に座り込んだ僕はコードを摘み、首の後ろ側を引っ搔いて皮膚に偽装された蓋を開けると、そこにある筈のジャックに端子を突き刺した。

「いい」

脳を突き刺す様な刺激がビリビリと駆け抜け、やがて網膜に直接映像が映し出される。今見ている景色の上に青い画面があって、その上に初期設定の文字が踊り、滝の様に文字が流れて箱が、箱の中の機械が僕と同調を始めていく。

『初期設定：開始』

『所持者：』

所持者の欄に意識を合わせて「弘中和人」と漢字を思い浮かべる。すると『所持者：弘中和人』と設定画面が書き変わり、続いて年齢体重血液型特定の持病等と設定が行われていく。

パソコンに後付けでつけるＨＤのようなものだ。僕自身の脳もいじくられていて、その容積の20％は機械が占めているが、それに更に演算能力を足す為の後付けとしてコレを使う。と言う事を僕は聞いて知っていたし、実際に使った事もあった。ただ、実験で使われた物よりもコレは数段パワーが上だった。恐ろしい速さで1と0が書き変わっていくのを感じる。ともすれば僕自身の演算能力が負

けて、時折視界がブロック状に割れて1と0と意味不明の単語が羅列された。

「ただだけ箱——説明でも箱と言われた——と繋がっていたかわからないけど、ノックされる音に気付いて僕は首筋から端子を抜いた。強制終了に文句をいう事も無く、待機状態を維持する僕の脳。」

またしても真田三尉が「入れ」と低い声で言い、続いて誰かが部屋に入ってくる。それを僕は冷たいコンクリートの床から立ち上がり、直立不動で眺めていた。

肩で切りそろえられた真っ白の髪と、血の色をした瞳が目に入ってきた。カーキ色の野戦服に身を包んだソレは黒くて細長いケースを大事そうに抱き締めている。

「初めまして。頭脳特化の弘中和人です」

「初めまして。肉体強化の赤目です」

コクンと頷き、慌てて敬礼をしたソレに向かって僕も敬礼を返しながら「赤目？」と尋ねた。

「人間味を排除する為に性を与えられていません。頭脳特化と違って私は戦う為だけに作られましたから」

なるほど、と僕は頷いた。だけど、僕自身も僕に戦う以外の使命があると始めて知った。

やがて赤目の担当だった男が部屋の扉を閉め、しっかりと鍵を掛けて三度ほど確認してどこかへと歩き去った。

四肢はある、頭もある、だが、異様に細い。僕が男の兵士しか見た事がないせいだろうか？ 赤目は女性体の兵士であるようだった。戦う為に作られたにしてはあまりに細い足、枯れ木のような腕。眼光が時々チキチキと音を発てて光る。階級章は二等兵。

「僕が上官と言う事でいいのかな……。親睦を深めるのはとりあえずおいといて、まずはベッドの上と下を決めよう」

「私は下を希望します」

「上官権限で却下する。君は上だ。それからロッカーは左を使ってくれ。僕は右を開けてしまった」

あつと言つ間に話題が尽きた。赤目がそろそろと歩いて左のロツカーを開ける、

「あの、」

「ん？」

「男物が入っているのですが……」

これはどうなるのだろうか？ 確かに僕らは人に似た機械として作られた。だけど、女性の体を持つ以上、支給品も女性の物にするべきではないのか？ 「少し待っていてくれ」と赤目に言い、先ほど中断した初期設定を再開する。

初期設定を終えると予想通り、基地内部と繋がるLANが一つだけあった。そこにアクセスし、赤目の支給品について問い合わせると、

『ひと月後の支給までそれで代用されたし』

という返事が返ってきた。ソレにふむふむと頷き、書いてあることを赤目に向けて音読してやる。すると赤目は少しだけ困った顔をしてから、「わかりました」と敬礼をした。この場合敬礼はいらないのではなからうか、そう思い僕は「私用の場合は敬礼はいらないのではないか？」と赤目に訊ね「上官殿にはいつも敬礼だと教わりました」と返され「これから共同で暮らすのに敬礼は面倒であろう」と言い返す。三十分程かかって僕は赤目に、自室内においては敬礼と敬語を使わなくて良い、階級を意識しなくて良いと取り決めた。それに対して赤目が「じゃあ私ベッド下が良いです」と反論してきたので話はややこしくなり、結局夕食の時間までありとあらゆる事について言い争う結果となった。頭脳特化の僕の圧勝、もとい詐欺師の口上が炸裂した。

所在 一（後書き）

読んで下さっている方よ、本当にありがとう。

一つだけ謝らなければならないことがあるのです。

……ごめん、タイトル飾り——！

所在 二

食事は全員が広間に集まってから行われる。時間の十分前にこなければ飯は抜かれる。

席にあまりはなく、僕と赤目が向き合って座る両隣にも他の兵士はいたのだが、極限まで席を僕達から離している為、ほとんど専用テーブルとなってしまうた。僕と赤目は機械的に夕食を食べ、機械的に盆を返し、機械的に挨拶をして自室へと戻った。後ろには真田三尉がついてきていて、僕らが部屋に入ると鍵を閉めた。

部屋に入ると僕は箱を持ってベッドに寝そべり、箱の能力値を理解する為に電子の海に潜りっぱなしになり、赤目は細長いケースからドラグノフを取り出して整備を始めた。細長いケースにはドラグノフの他にM4A1と自動式拳銃が収まっており、それぞれ90発ずつ弾も入っていた。

「ふう」

目を剥くような速さで三丁の分解整備を終えた赤目が冷たいコンクリートの床に寝そべった。ベッドの下が取れなかった事が余程悔しいらしく、半眼で僕を見ている。なるほど。確かに上では銃器の分解整備は天井が近すぎてできない。

そして、彼女が赤目という名を与えられたのは、普通の人間にしか見えない彼女を道具として扱う為なのだろう。そうぼんやり考えた。

「頭脳特化って、」

「ん？」

「何をする為に作られたんですか？ 私は解を求める為に、って聞いたんですけど」

「解？ ああ。指揮官になるべく作られたんだよ。この戦況はどうだ、というのを確認する為に後付けの箱まで使って計算し、戦場を最適解に導いていく。僕らはその為に作られた。無形が現れたさい

にも、有線を使っていれば最低限の計算は出来るしね」

と赤いコードを目の前に掲げて見せる。すると赤目が、

「私は今ある兵器を最大限に活用する為に作られました。進化、御存じですよ？」

もちろんと頷く。

進化とは、怪の成長の事である。環境進化と適応進化の二つがあるのが昨今では知られているが、そのうちの環境進化は出没する地域によって形態を変化させること。例えば日本ではあまり見られないが、ロシアの奥地などになると怪に毛が生えたり、皮下脂肪が厚くなったりするらしい。コレに対して適応進化とは、外敵。つまりところ僕らの攻撃に対して適応していくことを示す。例えば日本やアメリカ等に出没する怪には熱系の攻撃が効きにくい。怪が出てから数年間、日本は町での出現が多かったために火炎放射器を使った事、アメリカは広大で何も無い土地に怪が現れた場合は迷いなくミサイルや焼夷弾を打ち込んだ事に由来する。不燃性の液で体を包んだり、表皮組織を瞬間的に捨てて再生させたり。そういった特性を持ち出している。

だから、僕らは驚異的な威力を誇る武器を持ちながら、それを使う事が出来ない。万が一それに適応された場合、自分達の首を絞める事に繋がってしまうからだ。だが、適応進化は進化を誘導する事が出来る。貫通力に優れた攻撃が来た場合は、単純に貫通力を弱める生物へと変性していく。

つまるところ、銃だけを使っている限り彼らは、皮膚を硬くする、臓器を極端に守る、速度を上げて避ける、等の基礎能力しか進化できないわけだ。各国はこの適応進化を酷く恐れている。

とある共和国において、ドルトンの悪夢と呼ばれる事件が起こった。共和国軍が「怪の体内組成は人間や他の動物とも大きく異なるが、タンパク質の塊であり、酸素も必要とする」としてサルファ・マスタード等の生物兵器による鎮圧を開始した。

最初は良かった。怪たちは為すすべもなく薬に焼かれて死亡し、

ガスは拡散し問題ない濃度まで下がる。繰り返した。繰り返した繰り返した。馬鹿の一つ覚えのように繰り返した。

結論からいおう。土中を移動するタイプの怪が多数発生、共和国軍が気付く事もないままに怪は首都まで土中を移動し、唐突に尾を外気に晒し、彼らがやったことをと同じ事をした。サルファ・マスタード、ホスゲン、種々多様な毒ガスが首都を包み、首脳が逃げる間もないうちに国が滅んだ。近隣二国もその被害を受けたが、その当時は辛うじて残っていた国連軍が総出で動いて土中を移動するタイプの怪を殲滅した。

——どこからでも現れて、こちらを追うように攻撃してくる。まるで幽霊^{ゴースト}だ。

誰が言い始めたかは知らない。だけど共通意識として皆が持っている。そんな言葉。

「私は可能な限り銃を使い続ける為に設計されました。目、わかりますか？」

「たまに黒目の部分……赤目の部分かな？ その周囲が動くね」

「機械に眼球の補助をさせているんです。黒目にしていないのはレンズが天然物ではなく人工物だからなんです。人工着色をする必要性がないため、また精度が乱れる場合があるので。血の色がそのまま浮き出ています」

どうりで血の赤なわけだ。なるほど、と頷き、期待に満ちた目で見ている赤目をぼんやりと眺める。そんな目で見られても、僕にはそんなビクリ面白機能は頭蓋骨の中にしかないんだけど……。まさか頭蓋を割って見せろというのだろうか？ いやいやそんなまさか。

「明言しておくけど、僕にはそんな目で見てビクリみたいな物はないからね？」

「首の後ろ、どうなってるんですか？」

見えないから意識から外れていた。僕はベッドの上で態勢を変えてうつ伏せになり、右手で首筋を引っ搔いてジャックを赤目の前に晒した。

「おおー」

赤目の手がうずうずと動くのを見て、「触ってもいいよ」と言う。すると、おずおずとはあるが赤目が僕の接続骨子の辺りを触っているらしい。らしいというのはその辺りの感覚が、麻酔をかけたようにぼんやりとしたモノであるからだ。特に接続骨子のジャックなんて何も感じない。ただ押された圧迫感が喉の奥の方にくるだけだ。やがて満足したのか赤目が僕から離れ、いそいそと二段ベッドの上におとなしく収まった。銃のケースはちゃっかり上に持ち込んでいる。油臭くなるのが気にならないのだろうか？

「なんて呼べばいいんでしょうね？」

「は？」

「弘中さんですかね、和人さんですかね？ それとも隊長！ でしょうか？」

「……好きに呼べばいいと思う」

「ではでは和人さんで。ところで和人さんは、実験所でも和人って呼ばれていたんですか？」

「……グレーテルが僕らペアの名前だったよ。揶揄して帽子屋なんて呼ぶ人もいたけどさ」

「ペア？ ペアの方はいらしてないんですか？ あと、帽子屋？」

「ペアは箱の事だよ。繫げば、繫げればわかるかもしれないけど、何となくもう一人、なんだよ。研究員達も僕らを、僕しかいないのに「お前ら」って複数形で呼ぶ事があるから。それで皆ペアって自分の事を呼ぶようになった。帽子屋は……鏡の国のアリスって童話知ってる？」

「知らないです」

「アリスは鏡の国っていう不可思議なところにいつてなんやかんや、って話なんだけど。帽子屋っていうのはそこに出てくるオカシナ人

のこと」

19世紀のイギリス、帽子屋では帽子の防水加工にシンナーを使っていたという話もある。以外に童話と言つのはそういうところからも情報を取り入れているものだった。

「すごいですね。どうして知っているんですか？」

消灯時間を過ぎたらしく、電灯が何の前触れもなく消えた。どうりで電灯のスイッチがないわけだ、と一人納得しながら、

「頭脳特化は何が起きても対応できるようにひたすら知識を詰め込まれるんだよ。関係無いと思われる知識まで、ひたすら。基本的には戦術の勉強……なのかな。とか、国語とか数学やったり、色んな国の言葉を習い続けたり。ひたすら頭を使い続ける感じかな」

「私たちは逆ですね。頭なんて使いません。ひたすらの撃つたり、鉛玉と150mの水を渡されて、フル装備で山を12時間以内に二つ踏破してこい、とか。2キロ先の的に、スコープを使わずに弾丸を当てたり」

「2キロ？ スコープを使わずに？」

「はい。集中すると目の焦点倍率を変更できるんですよ。できたからと言つて、当てるのは簡単じゃないんですけどね」

たはは、と赤目がベッドの上で笑う。でも、赤目はできたからココにいるのだ。人と機械のハイブリッド。それが僕と赤目。戦場を変える為に生まれた兵器。

「そうそう、そう言えば――」

「君、眠る気ないだろう？」

所在 二（後書き）

読んで下さる方って本当に偉大ですよ。

だって素人ですよ？ 毒にあたる可能性が高いのをわざわざ読んでくれてるんですよ？

その中でもキャリア一年ちょっとの私という、解毒不可能クラスの物を読んで下さっている方、本当にありがとうございます！

所在 三

早朝5時50分に突然点灯する電灯。それに合わせて鳴り響くサイレン。起床の時間だ。

起き上がって赤目と一緒に装備を点検し、布団を畳んで直立不動で待機。していると案の定ノックと同時に「真田三尉だ。朝食の時間だ、出る」と言って扉が開けられる。

外に出ると肌寒いくらいの温度で、いかに中が蒸し暑かったかがわかる。額から零れる汗を拭いながら身震いを一つ。

朝食の時間は昨日の繰り返しだった。皆が限界まで僕らから離れて朝食を食べる。私語は慎まれるのが良いが、特段禁止されてもないのに無音。——と、その無音を打ち破る男がいた。

「——うおっほん！」

咳払いをして自身に注目を集めさせたのは、東中基地司令だった。周りの皆が僕らから視線を逸らしてうげえ、という顔をした。何か良くない事が始まるらしい。

演説が始まった。

この基地の生い立ちに始まり、何故か途中に東中基地司令の半生を挟み、第一次東京怪災に対して意見を述べ、何故か東中基地司令の恋物語が語られ、隣にいた士官が頭を小突かれ青筋を浮かべそれでも笑顔で頷き、最後に僕らの話になった。

ようやくすると、お前らなんか使わないで大丈夫。せいぜいただ飯ぐらいであれ、とのこと。

その言葉に僕と赤目を思わず目を合わせた。だって、そんなの——困る。アナタ達を守る為に作られたのに、アナタ達の代わりに戦いに来たのに、ただ飯食ってるはない。あんまりだ。そう憤りながらも僕と赤目は同意を求められる度に黙って頷いていた。東中基地司令は同意を求めながらも、こちらを決して見なかったけど。

朝食の後、一般兵はランニングに行き、僕と赤目は真田三尉に連れられて基地の外に出た。赤目は朝食の時にも持ってきていた銃ケースを愛おしそうに抱き締めながら、僕よりも幾分か速いペースで歩いて行く。

連れてこられたのは地平線の先に山が見える――射撃場。僕が目視する限り、限りなく遠くに豆粒より小さい何か赤い何かを振った？ 事がわかるだけ。

「赤目二等兵、ドラグノフでアレを撃ちぬけるか？ 約1500m 離れているが」

「可能です」

やって見ると促されて赤目が銃ケースから黄色いペイントが施されているドラグノフを出した。そして徐に立ち上がり、顔をドラグノフのやや上側に置き、腕と腰を使ってホルルド。それらの作業が完了し、間髪入れずに撃った。タアーンと乾いた音が鳴り、双眼鏡を覗いていた真田三尉が「命中。恐らく中央」と言った。そしてその後「スコープ覗いてなかったよな？」と一人心地だ。その後も赤目は何度か撃ったが、一度たりとも外さず、逆に二度目からは数発連続で撃つ有様だった。一発撃つ毎に、赤目の足元の土が僅かに削れる。軍用ブーツを僅かに滑らせながら、全身を使って衝撃を地面に逃し続けている。銃と言う簡単な仕組みの武器を使う為に、人体を改造して辿り着いた境地。武器そのものよりも遥かに進んだ技術を使ってできた人間兵器。

やがて真田三尉がどこかに連絡を取った。すると、的の方に軍服姿が何人が現れて、最初の的のさらに向こう、恐らくは100mずつ感覚を開けて的を設置していく。しているんだと思う。僕にはほとんど見えない距離だから。

「よし、退避」真田三尉の連絡によって人影が走って逃げた、と思う。

「撃ちます」

宣言通りにドラグノフを震わせる赤目。間髪入れずに追加された

的と同じ4発を撃ち終わり、ドラグノフにセーフティをかけてから降ろす。「後藤、山田、吉島、佐田。至急確認」そう真田三尉が無線連絡すると、「1600m地点、中央に命中」「1700m、同上」「1800m、同じく」「1900m、当たってます。あ、いや、中央に命中」と連絡が帰ってきた。おおーと周りがどよめく。気が付けば、ランニング途中と思われる兵士がそこら中を取り囲んで見ていた。見世物小屋に集まる見物人のようだ。

「赤目二等兵、最高で何mの狙撃が可能だ？」

「2390mです。スコープ使ってもそれくらい……」

「人間に劣ってんじゃない」

周りの人ゴミからボソリと風に乗って聞こえた声。ピクリ、と赤目が肩を揺らす。すると別の位置から「待てよ、確か最高記録は2670mだろ？　ただあつちは寝撃ちだろ？」「別に狙撃兵なんだから立たなくてもいいじゃんか」「日本は富士さんの周りにも町があるから、移動可能で即時撤収可能な兵員が求められてるだろ。だから立ち撃ちなんじゃねえか。馬鹿かお前」「あん？　現在の戦法が囲んで追い立てて、集中攻撃で仕留めるスタイルだろうが。教本やりなおしてこいよ頭空っぽ」「だからソレは俺らのオーソドックスなスタイルだろ？　損耗を極限まで減らした」「だからどうしたよ」「強化特化組の最終目標思い出せよ。分隊レベルで戦場を優勢に導く、ないしは10倍の戦力を相手に味方の撤退時間を稼ぎ切る事だろ？　通常の方法でできるんなら苦労ないっての、鳥頭」「んだとゴラあ！」「吼えてんじゃないやねえよ低能」「てめえ、ちつとばっか座学できるからつてなあ、調子のとつといわすぞ？　実技は俺の方が上だからな？」坊主頭が腕まくりをしながら立ち上がり、軍帽を被った方がやれやれと首を振りながら立ち上がる。周りは誰も止めない。むしろ囃し立てている。赤目は目を白黒させている。真田三尉は口元に手をあてて、

「全員、昼飯抜きにされたいか！」

真田三尉が吼えた。すると、立ち上がっている二名以外が匍匐前

進で実に素早くその場から離れた。「すまん」「少しはわけてやる」「グッラック！」等と声をかけつつ逃げていくが、声を聞かれたら姿を隠しても意味がないのではないだろうか？ 立ち上がった二人も「気を付け！ 歯を食いしばれ！」と頬を張られ、その後に解散。くるりと赤目に向き直った真田三尉が「あー」とか「うー……ん」とか暫く悩んだ後、「気にしてなくていいぞ」と肩を叩こうとして思い悩み、やがて腕を降ろしてしまった。その気遣いに「ありがとうございました」と赤目は返ししながら、しまえと指示が来たドラグノフを丁寧にしまっていく。

真田三尉が肩を叩かなかった時に、赤目は拳を握っていた。白く白く、肌から血の気が失せる程。

それを僕は、見なかった事にした。

昼食をはさみ午後は、赤目ではなく僕が試される番らしかった。

赤目とは別行動となり、僕は座学の教室へ、赤目は射撃訓練へと赴いた。

基地内部において座学を受ける者はあまりいない。士官候補生や特殊な免許を必要としている者だけが受けるからだ。日本における「誰もが受けられる平等な教育」は既に崩壊しており、とびっきりの金持ち及び、とびっきりの天然物頭脳、これらのうち片方がなければ中学校以上の教育は受ける事が出来なかった。が、である。軍部に入り士官候補生コースに入ると、無償の上給料をもらって勉強を教わる事ができる。これ目当てに軍に志願する者も多いとかなんとか。

羽貫貞弘はその手の人間であるようだった。あの時立ち上がった二人のうち、軍帽を被っていた方である。

僕が教壇に立つて怪についての基礎知識から、考察までを黒板に書いていると背後からちよいちよい「質問！」という声上がるのだ。八割は羽貫であり、一割は羽貫に対抗意識を持っているらしいあの坊主頭であり、最後の一割はそれ以外だった。この座学は希望

者全員が受けられるようになっていくらしく、立ち見も少なくなる。

「質問！」

はいはいと手を挙げているのは、振り返って見ればやはり羽貫で、「何ですか？」と問い掛けると彼は一瞬で喜色満面になり「骨型の怪は脊椎動物を真似ますが、その体が従来のモノに比べて格段に大きくなるのは何故ですか？」なるほど、なるほどと頷きながら僕は黒板に細かい網目のような物を二組書き込んだ。

「こちらの、」とんと左側の網目を小突く「網目の細かい方が従来の生物の筋線維だとしましょう」続いてもう片方の「網目の細かく太い方が怪のモノです」網目を逆手で小突く。そしてから一度深く息を吸い考えをまとめ、

「単純に言って筋肉の密度が違うからです。密度差はおよそ四倍ですが、筋力はそれを上回ります。また、彼らには巨体を維持するために必要な物が無いため、このように巨大化する事ができ、我々を攻撃する上において有効だからそうなった。と考えられています。さて、必要ないあるもの、とは何でしょう？」

ぐるりと皆を見渡すと、七割くらいの人が目を逸らした。答えられないからではなく、目を合わせたくないから目を逸らしたのだろう。知識は欲しい、だがお前は知らない。そう見て取れる態度だった。

「先生イ、はいはいはいはいはい！」「長田、うつさい」羽貫に窘められながら、元気のよいガキ大将のように手を挙げているのは、赤目につつかかっていった彼——長田実篤という名前らしい——だった。

「飯だ！ アレだ！ いや、答え言ったな！ だからアレです。飯が必要ないからです！」

「正解。それと僕は先生じゃないので、普通に弘中か和人と呼んで頂けると嬉しいです」

そう返すと教室の左後ろの方から「人間兵器って呼んでもいいですか？」という声が聴こえた。

「もちろん」

そう至極まっとうな顔をして返すと、問い掛けた彼は気持ち悪そうに僕を見て、やがて目を逸らした。その事について残念に思いながら黒板にエネルギーと大きく書く。

「エネルギーは生物の活動に必要な不可欠なものです。では、もしもこのエネルギーの補給を必要とせず、ただその時戦う為の生物がいたとします。これが怪です。消化器系を最初から持たず、体の内にあるエネルギーを使いきるまで活動し、その後止まる。この利点がある。彼らの巨大な体を支えています。例えば白亜紀の恐竜、首長龍は一日に数トンの食物を食べて体を維持したと言いますが、その半分ほどとはいえ巨大な怪はその餌の入手が必要ないんです。最悪の場合^{オートファジー}自食作用も使うという報告もありますし、体内でニトログリセリンを生成して爆発した。なんてこともあるらしいです」

つまるところ、

「生物と見る事のできる体をしてはいるが、地球上にいるどんな生物の型にも当てはまらないということです」

「質問！　ならば何故、骨型、蟲型、無形と分けられているのですか？」

「進化の方向性がそれらのどれかに所属しているからです。例えば、日本において初期の怪は非常に水分が多く、弾丸では致命傷を与えにくかった。その為に火炎放射器等が使われたわけですが、その初期状態、原生期と呼びますが、原生期を過ぎた辺りから怪は二つのタイプにわかれてきました。背骨の様な物を持ち、動物に似た形をとる骨型。昆虫に似た形をとる蟲型。余談ではありますが、骨型の進化の途中に猿はでしたが、人間はでいていません。これは一体何を意味するのでしょうか」

時計の針が四時を指し、僕に与えられていた講義の時間が終わった。僕が下げた頭に、数人が礼を返した。

所在 三（後書き）

多分、私が書いてきたものの中では話の立ち上がりが割に早い物と思われます。

今暫しのお付き合いが頂ければ、幸いです。あと敬語コレであつて
ますか？

所在 四

講義に出ていた組と、外で訓練をしていた組。

これらを見分ける時に非常に有効な方法がある事に気付いた。夕食の時、どちらかというと僕を盗み見ているのが講義に出た組、赤目を見てかなり腰が退けているのが外で訓練をしていた組。赤目は何かをやらかしたらしいが、素知らぬ顔をして味噌汁を飲んでいる。「えー、つと。弘中さんでいいんだっけか？」

唐突にかけられた言葉に僕は驚き、赤目も驚き、幾人かの兵士がむせた。声をかけてきたのは案の定羽貫貞弘だった。階級は軍曹。彼は切れ長の瞳を好奇心に輝かせながら、僕が返事をするより早くに言葉を繋いでいく。

「もしかして、数学とかつてできたりします？」

「一応……」

「関数って解けますか？」

「一次？ 二次？ 三次？ それともベクトルが混ざったもの？」

「……関数って、そんなに種類があるんですか」

「物理を勉強するならさらに増えるよ？」

「うおー、と机に頭をついて唸る羽貫軍曹。年の頃は20を少し過ぎたくらいだろう。日に焼けた体にしなる筋肉が絡みついている。やがて復活した羽貫軍曹が「二次関数でこれ、三角形の面積を求めろっての。自分でやってみても答えがあわなくて」とノートを取り出して僕に見せた。わら半紙を綴じて作った、お手製のノートにはピッタリと公式と数式と図が踊っている。問題を見ると、三角形の面積を求める式の最後を2で割っていないだけだった。

「マジか……」

検算をしてあっている事を確かめた羽貫軍曹はまたしても頭を抱えて唸る。それを見て向かいの席に座っていた長田軍曹が「馬鹿でえ」と笑う。滅茶苦茶笑う。広間に反響するほど笑う。上官に殴ら

れて止まる。

「黙れ長田。一次式のxが求められない脳みそプリンは黙ってる」
「あ？」

いがみ合う2人。反応しない周囲。どうやらコレは僕達がくるまでの、基地での日常らしかった。やがて羽貫軍曹が長田軍曹から興味を失くしたように僕に向き直り、今度は怪について質問を始めた。
「骨型の中で日本に多いのは犬に似たタイプじゃないですか。何だと思います？」

「答えが出ていない質問だね……。一概にそうとは言えないけど、彼らの進化は僕らを辿っているんだと思うよ」「辿る？」「それ」
頷いてから口の中に残っていた米を嚥下し、

「進化の速度が異常なんだよ。本来生物は何百年も何万年もかけて生態や姿を変化させていくのに、彼らは原生期からわずか20年で僕らの付近。プラスマイナス数万年まで追いついた。その進化の速度はつきり言って、自己進化ならばありえない速さだ。つまるところ——これは僕の推論で自論だけど、彼らは周囲の生物に学んでいるのではないかな？」

「学とは、具体的に？」

「例えばサバンの辺りでは象皮を持つチーターのような怪が確認されている。これはそこに二種類の生物がいたからだよね？ 現に日本では確認されていない。その代り日本において日本特有の生物の姿で現れる怪の数は、非常に多い。生物の姿といっても、色々違うんだけどね。これはつまり、怪が周りの生物の進化を真似ているということではないかな？」

なるほど、と一つ頷いてから「だから今日の講義の最後に、人間は真似られていないって言ったんですね」と納得している。

「おい、それは人間が真似るに値しない生き物だってことか？」

恐らく広間の中央付近、僕からは見えないその位置で声が上がる。

「値しないとは言つてませんよ？」

見えない誰かに小首を傾げて答えると、

「ならば何故、人間が真似られていないと言う発言をした！」

ガタンと椅子を鳴らして立ったのは、五分狩りでキツイ目をした30代の男だった。確か座学にも出ていた筈だ。「佐々かよ」「人類至上主義到来か」「今だけ応援してやる。がんばれー」それらの声援に鼻を鳴らし、

「本官は愚行するが、人間兵器殿は本当に人間を守ろうとしているのか？」

「もちろん。それが作成された目的なので」

佐々という男の言葉に同意するような雰囲気を出す兵達が、僕の言葉に苦い顔をする。

「ではなぜ、人間は真似られていないと言ったのか。その意図をお話していただけますか？」

「話すも何も、事実ですので。未だかつて人間を模倣した怪は出ていません」

「ご飯も味噌汁も食べてしまった。たくわんをポリポリと噛みながら返す。」

「人間を真似るプロセスがまだ発生していないからだと思えますけどね。今のアナタの口上は意図不明で、ただの憂さ晴らしのように思えます。静かに食べましょう」

視線の先で、佐々という男の何かが切れた。気がした。佐々が一度大きく深呼吸をして、こちらをねめつける。貧乏ゆすりが酷い。

「幾つか質問をしたい」

「どうぞ」

「まず一つ。人間を真似する必要性とは何か。二つ。怪の存在目的とは何だとお考えか。三つ。アナタは人間が怪に勝てると思っているか」

そこで言葉を区切る佐々。僕は食べ終わってしまった夕食の盆をぼんやりと眺め、透明なプラスチック製のコップに入っている水を

二口飲み、

「アナタの疑問の答えは一つに行きつきますね。僕の中では、ですが。長くなりますが、よろしいですか」

黙って頷く佐々。止められる筈の上官たちは黙ってこちらを見ている。全員が僕を見た。

「怪の存在目的は、彼らにインタビュした人がいるわけではないので正確にはわかりませんが、人間の数を減らすないしは絶滅させること。もしくは何らかの物体の破壊ではないでしょうか。人間を減らすだけなら、日本で言えば富士山周辺に出現場所を選ぶ必要はなく、また何らかの破壊目的ならばそれを達成すればいいだけです。結局わからないわけです。さて、」

首をコキコキと鳴らして、ついでにのびもする。それを佐々が苛立たしげに見ている。

「人間を真似するプロセスが発生するのは、彼らが本当に人間を滅ぼそうと思った時でしょうね。ドルトンの悪夢は必要に迫られたから、人間の使う兵器を真似した。というところでしようけど……。」

東京第一次怪災を知らない人はいますか？」

いる筈がないとわかりつつも、確かめる。

「未曾有の大災害となった東京一次怪災ですが、実際に怪が襲った人間は4万人程と言われています。ですが、被害者の総数は7万人、行方不明者は40万人にのぼります。ぶっちゃけ、パニックって人が人を殺しちゃったんでしょうね。公にはされてませんが。怪を追って東京についた軍ですが、この死傷率もまた凄い。5割を超えている。部隊で言うなら全滅です。ところが不思議な事に、彼らの死体は身ぐるみが剥がされている場合があった。綺麗に。コレ、一般人が銃器を奪って撃っちゃったんじゃないですか？」

投入された軍は総数2万8000。即時召集できる全てが集められた。このうち2割が怪と戦って死亡したとされ、残りの3割は何故か死んでいる。彼らが持っていた弾丸の総数は一体何発になるのか。なまじ、怪が現れて2年が経過し、国民に銃の使い方をレクチ

ヤーしていたりしていたのが、まずかった。

統制される代わりに安全が保障される筈だった。

だから我慢していた。

キヤリアが消えて農作業に従事した。

自由が削られて、命と引き換えに我慢した。

贅沢に慣れきった生活が急にみすばらしい物になろうとも、生命が保障されるなら、と。

だが、怪はきた。目の前で人を潰している。後ろからついてきた軍は、都民が退避するまで中々撃てない。

なんだそれ。

なんだ、それ。

なら、俺が撃つよ。私は逃げる、あ！ 轢いちゃ……。痛え！

誰だ今撃つたの！ 軍か？ 何やってんだよアイツら、俺の方が上手くできるっつーの！ 一人二人殺してもいいから、さっさと化物止めるよ！ 軍に誘導された先に怪いんじゃない！ どうなってんだよ！ おいおいおいおい！ 何だコレ、とまんねーよ、とまんねーよ！

「怪とは何なのか。当時は何もわからないに等しい状況だった。東と西に物流が寸断され、地下の輸送手段が確立されるまで日本は混乱を極めた。正直、怪が殺した数より、怪が現れたという事が原因で始まった何か、あるいは止まった何かの所為で死んだ人間の方がずっと多いですよ。数十倍、数百倍。だから、怪が人間を真似たら、もし、恐怖というものを理解できたら、まずいかもしねませんね！。だって僕ら、常に王手をかけられてるんだから」

「……王手？」

全員を代表するかのように、羽貫軍曹が問う。

「かけられてるんですか、王手」

「ガツチリと。だって僕らが怪を止めていられるのは、怪が今の姿だからじゃないですか。もし、怪がドルトンの悪夢と同じ戦法を取ったら、どうします？ 彼らは既に、できる、ということを示して

いる。進化にしたって、それぞれの出現場所から現れるのには、その地域だけのメモリーというんですか……。特徴を持っていますよね。どうしてソレに、他のメモリーがプラスされないと言えるんですか。敵は何もないところから現れます。なら、情報の輸送くらい容易いんじゃないですか？ 具体例が少ないため、またドルトン为例にとりますが、もし、怪が、ホスゲンやサルファ・マスタードが他の人間にも有効だと気付いたらどうしますか？ あの中和国周辺は国を捨てて逃げましたよね、彼らが止めようもない化物になってしまったから。そのエネルギーが尽きて進めないラインまで、土地を放棄して逃げた。もし仮に、怪が巨体を捨てて小さくなられたらどうしますか？ 大気に舞うウイルスを真似て、人類が出会った事のない病原菌になられたらどうしますか？ 致死率が高かったらどうするんですか？ もう一体、幾つの王手がかかっているのかわかりませんよ」

ただまあ、と一呼吸置いて。

「人間を真似られるのはやっぱり怖いですねー。怪の行動は個々がバラバラで、好き勝手に動くから対処出来ているわけですよ。もし、コレが囃を使うようになり、隠し玉を持つようになり、戦術的に動くようになったらどうします？ 世界規模でコンタクトをとって、人類の戦局を動かしかかったらどうします？ だから別に僕は、人間を真似ていないということ、人間に真似る価値が無い、と言いたわけじゃないんですよ」

むしろ、真似られたらマズイと思っています。

そう残して僕は盆を片手に立ちあがり、慌てた様に赤目が続いた。誰も話さない。誰も目を合わせない。羽貫軍曹のようなタイプは、やはり稀なのだろう。まだ食事の終わっていない兵の横を通るときに「物は黙って使われてりゃいいんだよ、御高説たれてんじゃねえ」と吐き捨てられた。

「そうですね。そうありがたいから、ただ飯ぐらいじゃ困るんです」
東中基地司令はさっさと夕食を食べ終わり、とうの昔に広間から

姿を消していた。あのトドのような体で迅速に動くものだ、と感心する。

「だって、使って貰えなかったら、僕ら、所在がないですもん」

その夜、僕らは襲撃された。

真田三尉の隙をついたのか、それとも真田三尉が手を貸したのか。それはわからないけど、とにかく扉が開いて、顔を訓練用のガスマスクで覆った男4人に僕は襲撃された。手始めに眠っていた僕の腹が力任せに殴られ、胃の腑がひっくりかえるような衝撃で僕は目覚めた。目覚めると同時に、やはり来たか、という思い。頭を膝につけ、腕で体を覆いながら「赤目！ 基地司令か誰かを呼んで来い！」と口の端から胃液を垂らしながら叫んだ。赤目からの返事はない。2段ベッドの上上がった男が「……誰もいねえじゃん」と零す。男たちの襲撃に気付いた瞬間に赤目は既に部屋を飛び出していたらしい。

殴られてどのくらいの時間が経っただろうか。既に手足は麻痺していて動かせそうにない。僕に馬乗りになった誰かが「道具は！ 道具らしく！ 使われて！ いれば！ いいんだよ！」と一言区切りに僕を殴る。殴る。殴る。

不意に、衝撃が消えた。それどころか僕の上にあつた重さも消えて、

「真田三尉、基地司令殿、並びに高官の方々はどうしたらいいかわからず固まってしまったので戻って参りました。処罰を覚悟で反抗します」

薄目を開けると、既に3人の男が両肩を有り得ない角度に曲げて蹲っていた。

「速いよ……色々と。いや、遅いよか」

赤目が僕の上に乗っていた男を組み伏せて、右腕を両手で持ち、体を密着させながら曲げていく「お、お、おああ、ああ折れ！ 折れる！」声からして、夕食の時の佐々という男か。「ま、まっ

て！」ゴキリと肩が外された。
暗い部屋の中、赤目の目が、名前通りに赤く光っていた。

所在 四（後書き）

キャラ出し過ぎかしら、と反省してみたり。

読みにくくなってるのかと、物凄く心配してみたり。

なにかありましたら、気軽に感想を、結構厳しい感じでくれると助かります！

所在 五

三笠寛人は目の前に座る男を見て露骨に嫌そうな顔をした。

三笠の反応を見た男は意地悪そうに笑い、無精髭だらけの顎を撫でまわした。まったくインテリには見えず、むしろ雪男とかそんな感じの雰囲気を放ってはいるが、男はれっきとした科学者で、しかも世界トップクラスの頭脳を持っていた。

「で、本当なのか？」

「おうともよ」

ずかずかと三笠に与えられている部屋に上がり込み、三笠秘蔵の天然物の干した豚肉を勝手に食いながら、

「あいつらは設計された子供なんかじゃねえよ。孤児を拾って来たり、提供者を募って得た子供だよ。それをちつくら脳みそ弄ったり、体弄ったりしただけ。どっちかつーと、サイボーグに近いかもな」

「ナハハハハハハ！ と笑う男の唾が三笠に降りかかる。一瞬三笠の背後に怒り狂うカマキリが幻視された筈だが、男は気付かない。ナハハハハハハハ！ と笑い続けている。

男は小田切一馬という。18年前、人間兵器を作る計画が上がった時、その必要性を解き、強引に軍部にオーケーさせ、計画を作り発進させた男。それが彼だ。放浪癖の気があり、半ば実験室に幽閉されているが、三笠が来たことをどこからか知ると彼の秘蔵のコレクションを彼の前で食す為に現れる。対価として様々な情報を置いて行くが、三笠的に言うところ、むしろマイナスである。もたらされる情報が主に三笠の仕事を増やすからだ。

「それを何故今、私に話すんだ？」

げんなりしながら三笠が問い掛ける。すると小田切は口を開きかけ――携帯を白衣の胸ポケットから取り出して電話に出た。私の携帯にも同時に着信。時折、「やっぱり」「時期的になあ」とかうんうんと頷いている。やがて電話を終えると「噂をすれば影だな」と

笑った。

「富士宮基地に配属したろ、あいつら」

「ああした」

「現場の兵士に襲われたらしいぞ。んで、赤目の方が4人全員の肩を外して、向こうの司令部はてんやわんやの大騒ぎだそうだ。さて、と。やるべき事がわかったかね？」

小田切が言うのに合わせて着信したメールを読むが、大筋同じ事が書いてあった。

「何がだ、何」

「まあ確かにー、アイツらの倫理観外した方が戦場で使いやすからう、と彼らの存在意義を捻じ曲げたのは俺だけどー。でもでも責任は俺だけが被るんじゃないかって、資金を調達してきた三笠っちも被るべきっていうかー」

頭に握り拳をあてて「てへ」と笑う男、小田切一馬。見た目は雪男。三笠の胃に言い知れぬ冷たい物が落ちた。特に「三笠っち」の辺りでは全身が総毛だった。

「因果な子供を育てたな、お前」

鳥肌の立っている腕をさすりながら言うと、小田切は、

「馬鹿言うなよ。そうするしかなかったから、そうしたんさ。万が一クローン化の話が間に合った時、倫理観なんてあったらマズイだろ？ 目の前にもう一人自分が現れて、狂って死にましたじゃいけねーんだよ。ソレも自分だ、って納得できるように、最初から狂わせておくしかないんだよ。それにな。アイツらが実際、軍を裏切ったらマズイぜ。特に頭脳特化が既にいるっていうのがマズイ。周辺基地4つくらいは2人で落とすぜ？」

「まさか」

そう言って三笠は笑うが、小田切は笑わない。ただ黙って三笠の秘蔵コレクションを一口食ってはポイと捨てる。その行為を繰り返し続ける。近年、豚や牛など滅多に生育されないのを知っているがらの行為である。三笠がいつ怒るかを楽しみにしているのだ。

いつまでも三笠が怒らないのを感じ取り、残念そうな顔をしながら食い散らかした干し豚肉の処理を始める小田切に、

「まあ、私が動いて基地に話を通す事はできるが……。時期が悪いにも程があるだろ。どうしてもつと早くに言わない？」

「報告書に書いたと思ったんだよ。そしたらほら、報告書が俺のデスクの上にあつてな。思わず周りのやつと一緒に高跳びを企てたよ」
クシャクシャになった紙を三笠の前に差し出す小田切。小田切が言つた通りの内容が紙には記載されていたが、日付は今から17年前のものである。三笠の顔から表情の一切が消え、能面の如き顔で小田切を見る。この事が軍上層部に知れたら、二人の首ではすむまい。一体何人の人生がかかっているプロジェクトだと思っているんだ。

小田切はまたしても頭に拳を乗せ、「てへ」とやった。

小田切一馬も天才であるが、三笠寛人もまた天才の一人である。

切れ者中の切れ者である彼は、初等教育を受けただけの叩き上げでありながら、30代前半にして軍部の一佐まで上り詰めた。決して甘い男ではないし、脅して従わないなら脅しを実行する。剃刀のように細めた目からは小田切への殺意がありありと見て取れるが、不意にそれを消した。

小田切を殺せば日本の防衛が3%は難しくなる。それがわかってるから殺さない。

「壊さないでくれよーアイツら。アイツらが必要なのは平時の戦場ではなく、戦場が大きく乱れた時なんだからさ」

三笠は黙って小田切を見つめている。早く帰ってくれないかな、
と思いながら見つめている。

所在 五（後書き）

今更ながらにまどマギ観たのですが、物凄く面白かったので真似してみたい。魔法少女出してみたいマミりたい。さて、どうやってココから魔法少女物に変えていくか……。止めた方がいいと理性は言うけれど、こう、情熱がね？

人間 一

人間

不思議な事に、昨夜あれ程の騒ぎを起こした僕らに処罰は下らなかった。むしろ佐々達襲撃者にだけ減棒が告げられ、まるで軍部が僕らを守ったかのような状態になっていた。

昨日の騒ぎは後半から基地内部の者が野次馬として押しかけた為、半ば周知の事実となっており、その処置に納得のいかない者達が上官に直訴し、上官は上官で困り果てた顔をするといった状況だった。さらには、その日の訓練と講義を終えて部屋に戻つてくると、扉が内側からも鍵がかかる仕組みとなっており、赤目と僕に密かな感動を与えた。生まれて初めて、他者から侵害されることのない、自分たちの部屋が与えられたのである。赤目がロッカーを開けると、いかにも急場で揃えましたよサイズわからないので適当に買ってきました、という体ではあったが、女性用の下着なども用意されており、赤目は暫く呆然としていた。夜間のトイレの使用に関しても、僕がLANで真田三尉に連絡を取れば連れて行くという至れりつくせりの大判振る舞い。夜間に入ったらペットボトルの水とLEDライト二つも支給された。毘か？ 上げて落とすのか？ その日僕は眠ることができなかった。

騒ぎから一週間経った日の夜。

羽貫軍曹がお手製ノートを片手に僕らの部屋にぶらり、と現れた。赤目があからさまに警戒する中、羽貫軍曹が今度は社会について教えてくれ、と僕に言い、僕は羽貫軍曹に知っている歴史の流れを話させて、それを補完していくという形を取った。やがて大まかながら歴史は近代史に入り、そして今現在から10年ほどまえの辺りまで来た。

「この頃、地下輸送手段……名前なんでしたっけ？」

「名前はないよ。正確にはあるんだけど、開発担当者がガンガン変わって、その度にプロジェクト名が変更されたからいつの間にか地下輸送手段って定着しちゃったんだよ」

「って、どういう仕組みなんですか？ 日本全国の地下にレールを作ったってことしか知らないんですけど。日本って地震ありますよね？ 大丈夫なんですか？」

「大丈夫も何も、2000年よりも前から東京の地下は網目のように地下鉄が走っていたらしいよ。ただまあ、地下輸送手段は恒久的に、それこそ命綱だから持久力が求められてね。基本的には穴掘ってコンクリートで固めて、なんだけど、要所要所にカーボンナノチューブを挟んで地震によって発生するズレを軽減するらしいよ？ そっちはあんまり専攻で習わなかったけど……。軍の物質移送にも

噛んでるし、迅速に物質を運ぶコレのお蔭で、足りない人員をやりくりして怪とやりあってるわけだから感謝感謝だよ。噂では軍の兵器の試作工場も地下にあるとか。ああ、内緒にしときたいやつね」
「またまたあ、弘中さん冗談も言えるんすねー。地下でやらなくても、空いてる土地は死ぬほどあるでしょ」

にこやかに笑いながら羽貫軍曹はお手製ノートに今習った事を書き込んでいく。数回に渡って「弘中さん、さんやめない？」と言っていたのだが、つい先日了承したと思っただけの日「弘中様！」や「弘中殿！」と広間で呼ばれ、人間兵器が洗脳を開始したぞ、と騒ぎになったのだ。それ以来僕は名称を直すのを諦めている。

羽貫軍曹が「んじゃ、また明日！」とにこやかに笑いながら僕らの部屋から退場し、消灯時間になって電気が消えると早々に、
「あの人と随分仲がいいんですね」

と赤目が拗ねた様に言った。

「仲良くしてくれるなら、それが一番じゃない」

「最近、広間でも部屋でもあの人くる……」

「僕らが受け入れられてる証拠じゃない」

「僕『ら』じゃなくて、和人さんだけです。私は相変わらず誰にも挨拶されませんし、怖がつて誰も触れませんし……」

上でもぞもぞと動く音がする。

「怖いですか、私」

ともすれば聞き逃しそうな声量で、赤目が言う。

「触ったら何か感染するみたいに、避けられるんですよ。研究所で私を人間扱いしてくれる人はいなかったけど、皆触れてきたのに……。注射の時とか、何か理由がある時だけだったけど、それでも、触ってくれたんです。良い結果が残せれば頭を撫でてくれて、目の手術の後、1度何にも見えなくなつて凄く怖かった時は、誰かがずっと手を握つてくれたし。なのにココでは誰も私に触れないんです」

赤目が2段ベッドの上で嗚咽を漏らし始める。嗚咽を漏らしながら、涙声でそれでも訴える。

「私は自分の事を人間だつて思つてます。だけど、皆はそう思つてくれないんです。ねえ、和人さん。眠っちゃいましたか？」

「起きてるよ」

闇夜の中、見開いた視界は閉じていた時と同じ。上官としてこういう時は慰めてあげるべきなのか、それとも叱咤するべきなのか。この手の事は習わなかったからよくわからない。よし怒ろう、そしてフォローしよう。いけるいける、頭脳特化の僕なら会話を上手くまとめらるくらい余裕。さあいくぞ。待て、はやる気持ちを抑えろ。最初は何て言えばいいんだ？ おはようございますか？ いや、おはよふの時間じゃないぞ。落ち着け、落ち着け自分。そうだまずは素数を数えて心を無にしよう話はそれからだ。

「本当に起きてますか？ 眠っちゃったんじゃないですか？」

「2 , 3 , 5 , 7 , 11 , 13 , 17 , 19 , 23 , 29 , 31 :

…」

「眠つてるじゃないですか。意味わかんない数字、寝言ですか？」

心を無に帰している僕には何にも聞こえていなかった。そつと二段ベッドから降りた赤目が僕の手をきゅつと両手で包んだ事にもま

まったく気付かず素数を数え続け、100を超え、313を越し、
付いたら眠っているという……。

人間 一（後書き）

変身シーンとかどういう感じにするか決めたけど、大きな大きな問題が一つあります。

……どこで変身させたらいいんだろう？ ココからだ、確実に浮く。

人間 二

フォロー？ ええ、任しといて下さいよ。研究所では「人の傷口を素知らぬうちにほじくりかえす」「地雷原を踏破し地雷を踏み切る」「天然を超えて悟ってる」等と会話術においては数多の表彰を受けた僕ですよ？ 僕の成績がグリングに負けたのは会話術とコミニケーション能力だけだったけど、見る目がないとしか言いようがない。グリング、研究員いないときに「禿げ、禿げ、デブ、デブ！」って繰り返し罵ってましたから相当性格悪いですよ。天然のグレートルに対して計画性のグリングって、何故か僕同列どころか各上でしたけどそれって絶対何かの間違い——……………

「……は！？」

凄まじい量の寝汗と共に目が覚める。窓がないせいで今が何時かはわからないけど、多分午前3時くらいだろうとぼんやりと考える。「ふおろー、フォローしなくちゃ……………」

寝ぼけている所為か、夢の続きを口走ってしまった。

それにしてもやけに左半身が熱い。なんだこの熱の塊。右手で触ってみると妙に柔らかい。支給された毛布はこんなに柔らかくなくなつたし、質感も違う。そもそも夜間熱いから僕は毛布を使っていない。するとコレは何だ？ 夢の続きか？ いや、確かに脳は覚醒しているし……………

右手でペタペタとソレを触ってみる。細くてさらさらの糸の辺りから、手を横にすー、と動かしていくと滑るような肌の質感があり、玉の汗が浮いていると思しき感触がある。さらにその辺りをまさぐっている小さな穴があり、そこをいじくっていると塊が少し跳ねた。塊の辺りから熱い蒸気が噴き出してくる。コレ以上部屋を暑くされたらたまらんと、手をそこから離そうと動かすと、布と皮膚とに右手が絡め捕られ、動かなくなつた。

「…………ぬ？」

オカシイ。コレは確かに肌だと思うのだが、僕の肌には触れられている様な感触がない。なんだろう。僕の細胞が暴走して皮膚だけを伸ばしてしまったのかな？ いや、一日足らずでそうそう体積が増加するとは思えない。するとコレはアレか。電腦の故障で、ないものに触れているわけだ。触れている感触だけある、幻触というやつか？　するとコレ、実際は何も触っていないわけだ。さつさと右手の戒めを解いてもう一度眠ろう。

「よいしょ」

布を裂く様なまやかしの感触を得て、自由になった右手に満足して僕はもう一度寝入った。もう眠くて眠くて仕方が無かった。

電灯が付くと同時にサイレンが鳴る。いつも通りの起床だ。僕は目を開け、開け、何故だか赤目と目を合わせた。赤目が驚いた顔をする。何故驚く、明らかに僕が驚くべきところだろう。だってココ、僕の寢床なんだから。とりあえず起きて部屋を片付けないと真田三尉に叱られる。赤目と僕は同時にそう思い立ち、赤目と同時に腰を起こし、二段ベッドの下で向き合った。

赤目は随分と変わった服を着ている。首の回りと背中だけに布地があり、それ以外のところは破けてボロボロだ。下にはいているのは迷彩服をかなり折り返して裾を短くしたもの。なるほど。ズボンはともかく、シャツは斬新だ。新進気鋭のファッションといえるだろう。だが、こんな服果たして支給されたろうか？　されてないだろう。お手製か？　どやされるぞ。しかし、赤目はいつまで僕の左手を抱いているんだ？　暑苦しくてしょうがない。そして妙に柔らかい。というかこの熱さ、何となく覚えがある。昨日の夜に夢でこんな熱さに襲われたような……はて？　電腦がどうたらと考えた様な。

赤目は僕の視線を追って自分の体を見た。僕を見る。また自分の体を見る。ゆで蛸のように真っ赤になって僕の手を持ったまま後ろに飛ぶ。手を引かれた僕は引きずられて前に動き、ベッドの敷居に

思いつきり頭をぶつけた。

「い！」

頭の中でお星さまが白い光と踊ってる……！ 赤目は何故僕が頭を敷居に打ち付けたかを不思議そうな顔で見、その後自分が引きずった所為だと気付いて慌てて手を離れた。すると今まで僕の手と赤目の手で隠れていた体の大部分が露わになり、日の当たる部分ではないところは真っ白な赤目の肌、腕や腹との色の違いが美しい。赤目は慌てて双丘を手で隠して「あ、あ、あばば！」と一声残して自分のロッカーに飛びつき新しいシャツを取り出すと梯子を駆け上がってこそそと服を着替えた。こと、ココに至ってようやく僕は起き上がり、赤目を置いてさっさと布団を畳み、直立不動で真田三尉を待っていた。

……オカシイ。アレから大分経った。なのに真田三尉は未だ現れない。ただノックの音だけが響き続け「何かあったのか！？」とか「中で何かあったらしい！ 強制開錠するぞ！」などと叫び声が聞こえる。

「鍵！ 鍵開けないと！」

ようやく着替え布団を畳んだ赤目が叫んだ。僕とした事がうつかり、朝のハプニングのせいでパニックを起こしていたらしい。頭脳特化として致命的なミスだと思いながら僕は鍵を開けた。

「どうした！？ 何かあった！？」

真田三尉が血相を変えて飛び込んできた。そして周りを忙しなく見て異常がないか確認している。すると、僕が握っている布地に気付いたらしく、「それは？」と声をかけられ、そこに至ってようやく、自分が布団を畳む時にも決して離さず握っていたらしいソレに気付き、ソレをしげしげと眺め「シャツの……切れ端でしょうか」と答えた。

「ブ、ブラ、ジャア！」

後ろで赤目が慌てた様に言い僕の手から布地をひったくった。なるほど、アレがブラジャーなるものか。なるほど。しかし何で僕の

手にアレが？ 手をわきわきと動かしてみる。さっぱりわからない。
「この部屋の最高責任者である弘中和人軍曹に訊く。何があった？」
とすると昨日のアレは夢ではなく、本当にあったことで？

「昨日の夜赤目二等兵に深夜襲われまして、その時は電腦の故障か
と思つて眠つたのですが朝起きたら赤目二等兵が上半身裸で何故か
隣で寝ており、その後赤目二等兵に顔をベッドの敷居に叩きつけら
れ、今に至ります」

「どうも要領を得んな……。何があつたか、何が起こつたかについ
て説明せよ」

「確かな事はよくわかりませんが、僕と赤目が隣り合つて眠り、僕
が赤目のブラジャーをはぎ取つたのは確かでしょう」

真面目な顔をして話しているのに、真田三尉は何故か頭を抱えた。
そして「問題ばかりだ……」と漏らす。真田三尉の後ろでは何故
か異様な熱気が異様な盛り上がりを見せ「女かあ、何年見てないよ
？」「俺もう、人間兵器とかどうでもよくなつてきちゃつた」「男
と女と密室。化学反応で何が起こるか考えてみるよ」等と言う話声
が聞こえてくる。横目で盗み見ると赤目は真つ赤になって「あばば
「ふにゃあ！」等と要領を得ない言語を發している。新手の暗号か
？ 頭脳特化を欺けるとでも？ しかし要領を得ないな。それはそ
れとして、ココは自分がしっかりせねば。まずは昨日から今までを
思い出して……

記憶を反芻した瞬間、鼻血が噴き出た。

人間 三

「で？ えー、っと。研究所では男と女のアレやソレ、習わなかった訳だ」

「失敬な。頭脳特化の兵士にそんな漏れは有り得ません。非常時には知識の全てを入れた人類最後の」「小田切か？ あの馬鹿がそういう風に君を育てたのか？」「いえ、常盤という方です。小田切さんは時たま現れるくらいでした。知り合いですか？」「アイツは有名だぞう。それで、何。結局男と女のアレとかソレは知らないわけね？」「だから失敬な！ 上官でも怒りますよ？ 習った限りでは、おしべとめしべ説、コウノトリ説、キャベツ説、があります。そんなに判然としないもので人類の繁殖は大丈夫なのか、とペア全員で問い掛けた所、小田切さんが何やらビデオを持ってきてまして。『教本だ、ナハハハハハ！』と笑いながら上映しようとしたところ、他の研究員に袋叩きにされ、『研究結果に支障をきたしたらどうするんですか！』『二次成長については必要最低限だけ教えて、後は情報封鎖つてなつたでしょう！』等と責められまして。泣きながらビデオを守っている姿が実に哀れで、この人本当に頭が良いのか疑」「わかった、もういい。何も知らないということがわかった」

失敬な、と返す前に痩せ細った老医は内線で何処かへと電話をかけた。「まだ知らせない？ ああ、ずっと秘密でいくんですね、はい、はい」「いやー、普通の男部屋に叩き込めば何とかなると思いますよ。下品になりますけど」「結局誰が教えるんですか？」「私？ 無理無理、だってアレでしょ。赤い目の方……赤目っていうんですか？ アレにも教えるって、何をどう教えるんですか？」「だって結局」等と随分長い間話し込んでいたが、疲れ切った様子で僕を振り返り、無理やり笑った。

「えっと、それで昨日はいれたの？」
「何を？」

親指をスツと上げ逆手で作った穴を突つつく動作をする老医。指を何かにいれたかを聞いているのか……。つまるところ、それは「穴、ですか？」

「そうそう！ 何だ、意外とわかってるじゃん！」

やはりそうか。ならば答えるべき言葉は、

「いれましたよ。何だか跳ねて、物凄く熱くなってきました」

「……ああ、そう。避妊なしかあ。コレって、女性の医師呼んだ方がいいのかなあ？ 万が一着床してるとこまるよなあ。というか、子宮あるの？」

ほっとした顔が一瞬で地獄の最下層まで落ち、老医が頭を抱えてデスクの上でうおおと唸る。

この時、赤目と弘中和人だけが知らないだけで、基地上層部では彼らの処遇についてどう扱うかを決めかねていた。昨夜の騒ぎを報告した結果『できうる限りのサポートをしる』という旨の通達が届いた。軍上層部が決めた事だからしょうがない。なんとかする。だが、当初は道具として使えといていたのに、何故今になってソレを撤回したのか。会議は混迷に混迷を極め、上官達の目の下にはクマが浮き、上官の異様な気配を察して他の兵士も静かになる。そうして対策を考えている時に事件である。上層部は揺れに揺れた。このまま二人と一緒にしておくのはマズイ。だが、別の部屋にいれるのも色々と問題がある。やむをえない、二人を別々の部屋にしろ。下された決断。しかし。大変です！ 赤目が号泣しました！ なに！？ 和人さんが一緒にやなきや、嫌！ と泣いています！ 会議室が静まり返る。男と女か……。理解を超えますね……。誰かが呟いた。

こうして部屋割りの問題はさらに迷走を深める事となる。

この問題が空騒ぎに終わったのは、別の基地から女性医師を呼んで何も無かった事が確認されてからである。

また、ここにおいて赤目の知識も弘中和人と同レベルと知れ、二

人にどう教えていくかが相談された。が、明確な答えは出せず、結局は保留。ただし一周間に一度ほど、両者に指導教員を付けて「それら」の「知識」をいれさせることが後に決定された。

赤目の指導教員は女性医師、弘中和人の指導教員は羽貫、長田を筆頭とした基地内兵士である。

羽貫軍曹らの部屋は僕らの部屋よりも広く、八畳程の空間に四人で生活しているらしかった。窓はとつくのとうに開け放され、どこからか持ってきたホワイトボードを部屋の上座に設置し、その前に僕が座る。それを取り囲むように数人の男達が今日は俺たちが教える番立場逆転だぜ、とばかりにふんぞり返っていた。特に長田軍曹が。

「えー、授業を始めます」

羽貫軍曹が仕切って始まる授業。長田他数名がいそいそと教本の準備——この日の為に教官から隠し続けた物を持ってきたらしい——を始める。ピンク色の装丁に女性が扇情的なポーズで映っている。「まず初めに、おしべとめしべ説、コウノトリ説、キャベツ説、は間違いです」「そんな馬鹿な!」「はい、最後まで聞いてください。それらは微妙なお年頃の少女少女の問いかけをはぐらかす為に数百年の歲月守られてきた秘伝の小話です。では、これから本当の事を教えていきたいと思います」

羽貫軍曹がクイと手を振って合図をすると、長田軍曹が黙って頷き、傳いて僕に本を渡した。パラパラと捲って見ると、女性があられもないポーズでアラレモナイ事ヲシテイマス。脳がぐわんぐわんして思わず本を閉じたのを、両脇から伸びてきた手が再度ページを開かせ、無理やり僕にページを見せつける。目を閉じれば誰かの手が僕の臉を強制的にあける。視点をばやかせば目にライトをあてられる。何この拷問。

「はい、そこまで。弘中君が失神してしまう前に一旦ストップ」
チツと舌打ちして男たちが離れる。

「弘中君は小学生高学年の如きメンタルだという事がはつきりしました。では、ゆっくりいきましょう。大丈夫、怖くないですよ?」

僕以外全員が笑いをかみ殺している。否、長田軍曹は腹を抱えて笑っているが、笑い過ぎて音が出ていないだけだ。

「まず最初に、穴にナニをいれる。コレを覚えましょう。そしてナニをナニしてナニすると子供ができます。専門的に言うなら精子が卵子と受精して、子宮内膜に着床すれば子供ができます。ここまではオーケー?」

頷く。すると羽貫軍曹が「コレ以上、何を教えるってんだよ上層部は……。俺らも専門的なこと知らないっての」「いやいや、実技はあるだろ?」「ここ最近のか? それとも、ちゃんとした女のか?」「まあまあ落ちて着け、と長田が言い、次の教官に自ら立候補した。

「えーでは次に軍内部、特に前線基地での穴につ」長田軍曹が他全員に頭を叩かれて黙った。僕が何事かと身構えていると、早過ぎるだろ、俺らを警戒するぞ、馬鹿かお前、馬鹿がお前、などと長田軍曹に小声で耳打ちしている。腹から声を出す発声法が体に染み付いてしまっている彼らは気付いていないが、小声でも声は聞こえている。

結局この日はグダグダのままに終わり、男子組の二回目以降は実地されることはなかった。

だが、赤目組は中止されることなく順調に進んでいるらしい。男子組が中止されてから三週間が経過したが、毎週に赤目は徐々に恥じらいを覚えていき、ついには着替える際僕に目隠しをさせるようになった。その逆も僕に強要してくる。次の一週間が過ぎたら、縛られたりするレベルになるのではなからうか。

人間 四

季節はまもなく夏になる。

部屋の温度はますます上がる。最近麦茶が薬缶にいれられ部屋においてあるが、そろそろ限界と言わざるを得ない温度だ。だが、使われる為に作られたモノとしてぶっ倒れるまでは耐えるべきだろうか？ それとも、機械的に限界を告げ、待遇改善を要求すべきか。

そう思いながら今宵も僕は箱に接続を開始する。うつ伏せになり首にコードを繋いで、闇夜の中青色のウィンドウを眺め、思い、操作する。しかし、どうにも最近、誰かに見られている気がする。闇夜の中というよりは、電子の世界のどこから。LANを通して誰かが僕をモニターしているのだろうか？ それ自体は構わないのだが、時折不規則に入るノイズは止めて頂きたい。もしや、本当に電脳の故障か？ 生体素子を使った自己修復機能付きの電脳だが、故障が100%ないと言い切れない。

僕はまず、電脳に検査用のパルスを走らせた。異常なし。続いて箱に以上データ等がないか走査する。生体素子本体に違和感。

「なんだ？」

赤目は既に眠ってしまっているらしく無反応。

生体素子に違和感があるが、判然としない。そのまま暫く生体素子の違和感について考えたが『故障』『不具合』と判断を下し、翌日医務室に行つて検査の要請をしようと決めた。

……知識を共有。

……自己を再生。

……電脳幽霊が起動。

……認証名グリング。

小田切一馬は思考する。はたして、自分がグリングに下した処置

は正しかったのどうかを。研究所から富士宮基地司令部のコンピューターをハックし、気付かれない様に注意しながら、いつものようにLAN回線を通して彼の脳内を見守る。

不味い眠気覚ましの珈琲を呷り、彼が箱と接続しているのをモニターしている。すると、彼が違和感に気付いたらしい事に頬を喜ばせた。

ここひと月小田切一馬は数々の暗躍を繰り広げていた。その一つはわざわざ隠していた17年前の報告書を三笠に渡し、彼らの生活を確保することであり、もう一つは箱の中の彼女を再生させることだった。

グリングの脳波データをそっくりそのまま生体素子に焼きうつす。成功してもしなくても、一研究員的にはあまり興味がなかった。何故グリングが自ら生体素子に魂を移植し、次席にいた和人に主席の座を明け渡し、あわよくば自分が彼に使われる道具になろうとしたのか。それはわからない。興味をひかれない。わざわざグリングの意思通りに箱を彼に渡したのは、まあ気まぐれだが、調子が悪ければ変えればいいだけの話だ。だからそれ以上考えない。だが、成功し始めている電子の海の幽霊には心躍る。

彼が箱との接続を終了し、脳内に α 波をまき散らし始めたのを確認すると富士宮基地の支配権を戻し、別の事に思いを馳せる。

きつと、18年前。全てが始まった時に三笠や、他の誰かが自分の計画を本当に理解していたなら計画は始まらず、自分は狂科学者として屠られていただろう。

だが、俺は生きている。

なら、世界は俺の思うように動く。

「さて、」

キーボードを叩きながら、最後の仕上げにうつる。全てが露見する日は遠くない。その日までに、彼らを守る布石を打っておかねば。

果たして、肉を持たず、記憶を持たず、自我だけを持つモノは人

間なのだろうか。

幽霊 一（前書き）

戦闘入るので、少々長めです。

幽霊 一

幽霊

検査結果は異状なし。その事に疑問を覚えながらも弘中和人は礼を言い、医務室を後にした。時折外から根性出せえ！と怒鳴り声が響いてくるが、それが妙にしっくりくるのは僕がこの基地に慣れたからだろうか。

怪が出現する際には、出現地点から半径数百mにおいて電磁波や以上熱源が確認されることがある。ここ数日間その熱源反応が旧天竜区において観測されている。大型の反応ではないが、恐らく数日中に怪が発生するとあって基地はにわかには活気づき、既に120名程の隊員が現地周辺塹壕において待機と迎撃準備を始めていた。

基地司令の東中久仁彦は手柄大好き人間である。コレが富士宮基地における共通認識であった。基本的に東中基地司令は「空気の読めないトド」として名を馳せているが、超お金持ちから軍属になったというエリートコースを歩いてきた男なので、誰も文句を言えない。さほど優秀ではないのは基地内の全員が知るところで、特に現場叩き上げの上官の中には腸煮えくり返る思いをしている者も多いとか。基地司令の横暴を止められるのは副司令官だけだが、副司令官の戸田清は、それそれで問題があった。事なかれ主義なのである。よって現在富士宮基地においては東中基地司令には逆らうな、という不文律がある。元より上官に逆らうなどもつての外だが、さらに戒める必要があるということだろう。

翌々日、怪が発生する予兆の電磁パルスが跳ね上がった。

現場待機中の120名に、手柄を独り占めするべく300名の兵士を連れた東中基地司令が足され、さらには現場を一度見ておくと言う名目で僕と赤目も旧天竜区に派遣された。移動には富士宮基地から長野県各部に繋がっている列車を用いた。同時に2000人を

運ぶことの出来る、軍部専用車両だ。

旧天竜区二俣川周辺には既に機関銃と塹壕が用意され、熱源反応のある川向うからいつ怪が現れても迅速に対応できるようになっていた。

人のいないゴーストタウンの中を赤目と二人、現場から数百m後方の軍所有ビルの屋上で待機している。

しかし、陣の置き方が悪い。こじや右翼と左翼で攻撃ができない部分が多すぎる。前方に照準を合わせる限りは問題ないけど、もし後方に回られたりしたら火力が4割は使用できない。死角も多すぎる。

怪が出現する予定の川面は不規則に波打つ事があり、兵士の緊張を否が応にも高めていく。瞬きさえできない。

午後5時37分。瞬きもしていないのに遥か遠くに唐突に何かが見えた。

「蟲型、蜻蛉に類似するモノが二体。あとは骨型の狼に類似するものが一体です」

赤目が目をキチキチ言わせながら教えてくれた。僕は手元の双眼鏡を覗きこみ、赤目が言った通りなのを確認する。体長10mを越す蜻蛉と、7m程の狼。蜻蛉の羽が夕日を受けてキラリと輝き、その透明さの向こうに空をうつす。

「飛行型が出たんだ……。どうするんだろ。機関銃の整列だけしかされてないんだけど、コレって確か東中基地司令の判断だよな？」

「そうですね。ココ二年間飛行型が出ていなかったからと言え、油断しすぎですよー」

「赤目、敬語敬語」

失礼しました、と返す赤目の横で双眼鏡を覗いていると、不意に蜻蛉型が高度を上げ始めた。追いつがる様に機銃の掃射が上がるが、限界値に来て止まる。そこに狼型が突っ込んでくる。辛うじて両翼の攻撃が牽制として間に合うが、どうも臍目に見ても上手くない展開だった。蜻蛉は高度100m前後で旋回を始め、狼型はビル群の

隙間を縫うようにして姿を消した。

「展開包囲網って敷いてたっけ？」

「東中基地司令はいらないと言ったそうですが、他の方々がゴリ押しして、それぞれ1キロ後方、4キロ後方に2つあります」

「東中基地司令以外、胃に穴が空きそうな心境だよねきつと。それで手柄を盗られるんだから大変。お、蜻蛉型が何か落とした」

「岩ですね。機関銃が二門使用不可。あの蜻蛉、腹の下に腕ついていますよ」

「多関節の足だね。あ、狼型が中央を食い破った」

「幸いにも死者は出ていませんが、一人腕を噛みちぎられた方がいますね」

下から撃たれるARの猛攻も、蜻蛉の軌道に追いつけない。不意に止まったかと思うと、次の瞬間にはトップスピード。ジグザグに動き、左右だけではなく上下にも動く。

箱と繋がっている赤いケーブルを指で触りながら計算を開始。このままだと中央突破した狼型が右辺に食いつき、蜻蛉型が錯乱を行って、何でもない戦闘なのに死傷者が出る。という結論が出た。計算するまでもないというか。

僕から箱に繋がり、箱はさらに赤いラインを伸ばして軍システムと有線接続されている。このコードの限界がある為僕と赤目は後方待機しているわけだけど、正直もどかしい。無形を警戒しての対策なんだろうし、指揮官は前に出る必要がないからコレでも良い訳なんだけど……。

——東中基地司令から入電。上空の蜻蛉二匹を撃ち落とし、狼の足止めをしると。

「任せつきりじゃなか。ただ飯食わなくて良かったね、赤目」

「そうですねー」

タアーンタアーンと音が連続して、上空の蜻蛉の軌道が揺らぐ。トップスピードからの静止が上手くできず、徐々に高度を落とし始めた。それを見ているとさらに発砲音が響き、狼の右前脚が弾けた。

一瞬よろめく狼に機関銃と98式の斉射が浴びせられる。当初構えていた陣の裏側で狼は活動を停止し、僕らは焦点を蜻蛉に合わせる。上空にいた蜻蛉はもうビル群のすぐ上まで高度を下げていた。

唐突に、蜻蛉が緑色の体液を腹から吹き出しながら高度を上げ始めた。98式の弾丸もずぶずぶとその体に沈んで行っているが、最後の力を振り絞るようにして蜻蛉は上昇。高度150mに達すると、旋回しながら下降を始めた。まるで周囲の様子を確認しているみたいだ。全員が蜻蛉二匹の奇妙な行動に注視していた。

「本陣後方50m！」

突然赤目が無線機に向かって叫んだ。ハツとしたように本陣の周りで動きが生じるが、それを嘲笑うように蟲型、蟻に似た怪が食いつく。体長5m程の蟻はまるで伏兵の様に、油断が生じるその時まで待っていたようだった。数多の発砲音が轟くが、蟻の歩みは止まらない。自身の体重の500倍のものまで運べる筋肉が唸り、蟻の足に触れた兵士が吹き飛ぶ。顎がわなわなと動いたかと思うと兵士幾人かを一度に噛み千切り、口の端から腕や足をぼろぼろと零しながら、中央を突破していく。痛覚のない蟲ならではの、異様な生命力を有する蟲ならではの、単機中央突破。もう後いくらかもない位置に、東中基地司令が脂肪を揺らしながら何事かを叫んでいる。

「赤目！」

「わかってます」

赤目が立ち撃ちでドラグノフを連射する。半オートマチックの狙撃中であるドラグノフは弾倉をあとという間に空にしていくな。赤目の速射は蟻の足を全て吹き飛ばしていた。足関節の真ん中に穴が空き、それでも千切れない足もあったが既に前に進む事は出来ない。僕もそう思った。ゴロリと横たわった蟻がにわかに脈動し、その内部から体長50?ほどの、それでも巨大な蟻が多数飛び出して辺りの兵士に噛み付いた。

「何だあれ!？」

怪の体の中からさらに怪が出た!？ そんな発見例は今まで報告

されていないのに。

赤目が懸命に狙撃を続け、親蟻から飛び出した小蟻を7匹程仕留めるが、総数の2割にも及んでいない。その間にも蟻は放射状に飛び散っていく。その様子を文章化しながら軍上層部と富士宮基地に送り続ける。電腦将校として出来うる限り情報収集に努める。

誰もが忘れていた。

僕も、赤目も、地上で狼狽える兵士も。

誰もが忘れていた。

上空を旋回していた蜻蛉がビル群よりも低い行動になり、その腹を破ってあの腕の持ち主が降下されたことに。体長4mの蜘蛛が蟻と共同し挟撃するように反対側に降り立った。

まず、迎撃にそこまで追われていなかった両翼の兵士が気付いたが、伝令は伝わらない。蟻の事でパニックになっていたからだ。独自の判断で蜘蛛を撃ち始める両翼の兵士たち。だが、蜘蛛はすぐにビル群に阻まれ見えなくなる。分隊を出して索敵、迎撃、撃滅と行くのがセオリーだが、今は指示できる人間がいない。トドはまだ後ろから迫る蜘蛛に気付いていない。前方に蟻、140m。後方に蜘蛛、60m。間に合うかどうかの、瀬戸際。

「赤目」

「何ですか！」

赤目はビルに阻まれ見えない蜘蛛を諦め、小さな蟻を撃ち抜き続けていた。

「後で自分は止められなかったって、証言してね」

赤い有線を伝って意識を富士宮基地内部へ、そこから現場指揮のモデムに飛ぶ。目の前にうつる虚構の文字を追いながら、その回線の一つに僕の無線機を割り込ませる。両翼の無線機を奪取し、

「右辺は8名の分隊を出して先行させる。左辺は蟻までの射線が空いているから蟻に集中。中央はその場で迎撃せずに下がれ。機関銃は蟻ではなく後方の蜘蛛に向けて、右辺は蜘蛛が逃げ出してきてもいいように中央後方20m地点に照準」「誰だかさ」東中基地司令

の無線をオフにする。指揮権の奪取、軍法会議確定だな。僕の無線機に集中するのは「お前は誰だ？ 司令官からの通信が途切れたが、何事か」というもの。それらに一括して「東中基地司令に不足の事態が発生。また、次の指揮権を持つ最上二尉は蟻との戦闘で指揮が出来ず、代わりに特別指揮権を与えられている弘中和人軍曹が担当する」と返した。半白置いた「了解」の声に頷きながら細かい指示を出していると、赤目が片目を僕に向けて、微妙な顔をしていた。「嘘は言っていない」

しれっとそう言うと、やれやれという顔をしながら赤目が連射を続けていく。しかし、立ち撃ちでよく味方に当てないモノだ。

予想よりも蟻の移動速度が速い。中央前方約70mに蟻が30匹。中央後方25mでは蜘蛛が四方八方からの銃撃に立ち止まり逃げ惑っているところ。赤目が撃ったと思しき銃弾が蜘蛛の頭に口紅程の穴をあけている。やはり問題は蟻だ。「中央、陣地を捨てて右翼側に撤退。右翼は機銃掃射を辞めて中央隊の援護。左翼は展開して蟻を囲い込め。ただし射撃は右翼のみとする。左翼はあくまで追い込み役。同士討ちをしないように、射撃はあくまで右翼のみとする」

『了解』

返事に安堵し息を吐いた。コレで大丈夫、全て上手くいった。ほ、と息を吐いた瞬間——『東中司令官が中央陣地から撤退しません！ 切羽詰った声がそう叫んだ。』

……は？ どうして？ 一人で陣地に残ってるのか？ 恰好の餌食じゃないか。

『自分は撤退命令を出していないと、陣地に留まり続けています！』悲鳴に近い声が耳をつんざく。一瞬凍りついた脳。

『左翼一班、目標地点到着』『指令！』『右翼射撃を開始できない繰り返す、右翼射撃、』

『二班もつきました！』『意地はらないでこいや阿呆！』『何で司令官残ってた？ 拾っ』

『三班、目の前に現れた蜘蛛二匹を撃滅！』『馬鹿指令！』『撃て

ねえぞ、おい！ どうす』

『右翼一班、指示願う』 『誰かつれてこいよ！』 『おいおい、まにあわねえぞ！ 撃つのか？』

ただ一人陣地に取り残された東中司令官。慌てて中央兵が右翼から走って戻っていくが、間に合わない。彼らが辿り着くより早く、蟻が東中司令官を襲う。双眼鏡で覗いた先、東中司令官が通じない無線に向かって叫び続けている。蜘蛛は沈黙した。残りの蟻は12匹。間に合わない間に合わない、もう絶対に間に合わない！ 東中司令官前方10mに蟻、右辺30mに中央及び右翼兵。――間に合わない！ 赤目がただ一人、歯を食いしばってドラグノフを連射している。蟻の残数が11、10、9、外した、8、7、6、弾切れ。最後の弾倉。5、4、3、ビルの陰に入った。東中司令官まで残り5m。右翼の狙撃兵が独自判断で射撃。三発中、一発が蟻に命中。残り一匹。残り一匹なんだ。誰か止めてくれ！

意識を無線機の権限奪取から外してしまった。

『ひい、いいいぎやああああああああああああああああああああああああああああ』

音量MAXで、50？の蟻に足首を噛まれた東中司令官の絶叫が木霊した。

絶叫は随分と長い間、ゴースタウンに響いていた。総勢500名の無線機から進む叫び声。右翼兵が中央陣地に辿り着き、ナイフで蟻の足を削ぎ、顎を切り取って東中司令官から外した後も。暫く悲鳴とも泣き声とも取れる音が木霊していた。

叫び続ける東中司令官は麻酔を撃たれて一度おとなしくなったが、その後で僕への悪口雑言をこれでもかと吐いたらしい。全ては後で聞いた話だけど。同刻、僕は軍用のジープに揺られながら茫然自失としていた。どうして退いてくれなかったんだろう。無線機の回線は、東中司令官から全体への送信を不可にただけで、受信は出来ていた筈なのに。

東中基地司令は左足首をほぼ失ったらしい。本人はクローンによる移植を強く希望し、事実それは叶えられた。ただし、左足首の細胞がずたずたに噛み切られていたらしく、一度ひざ下まで切断した後の移植だった。話によると、以前よりも左足が数ミリ長くて歩きにくいとか何とか。

そして訪れた審判の時。僕は特別指揮権を「上官を貶めて奪った」とされ、一度は銃殺刑になり、気付いたら営倉送りにされていた。東中基地司令官の憎々しげな顔を見る限り、彼が望んだわけではなさそうだった。後から聞いた事によると、羽貫軍曹や、その時戦場に出ていた兵士が「東中基地司令官に逆らうべからず」の禁を破って、「あの時の判断の正しさ」と「東中基地司令官の落ち度」について上告したらしい。そんな彼らが今、僕とは別の営倉にいれられ呻き声を上げている。トイレと硬いベッドがついているだけの営倉。本来数人で入る筈のそこに僕は一人きりで入れられていた。富士宮基地の地下三階の営倉は寒い。夏目前だと言うのにコンクリート製の床は死ぬほど冷たい。隣の営倉から聞こえてくる「あつたけえー」「押すな押すな、落ちる！」「あつたかいけど、くせえ」等と言う声が羨ましい。隣の羽貫組営倉が騒ぐ度に営倉の管理官がつかつかと歩いていく、その度に静まり返る営倉だが、2回に1回は全員整列させられて頬を張られていた。

またしても始まった話し合いに耳を澄ませながら、僕は目に映る

虚構の紙に「何故自分があの時あしたか」という題目でレポートを描き続けていた。レポート作成は基地全体の決定であり、僕の精神状態に異常がないかどうかを調べる為でもあるらしい。レポート作成の為に渡された箱も床と同じ温度。

――まただ。

レポートを作成している時に感じる、誰かの視線。LAN回線はOFFになっていているのに。電腦にも箱にも異常がなかったのに、この視線は確かに感じる。じろじろと僕の一举一動を見つめるような、むしろ僕の中と一体化しようとするような。不可思議で気味の悪い感覚。ノイズは走らないが、何かがオカシイ。

「俺さあ、ココでたら結婚するんだ……」「営倉で死ぬ気か?」「それっていつからあるネタ? 2000年代?」「古いなあ」「ところであ、俺さあ、靴下干したつけ?」「しるか」「営倉出て、俺のクローゼットの中腐ってたらどうしよう……」「貴様ら! 営倉に入ってる時くらい静かにせんか!」「眠ってます」「寝言です」「ばっちりです」「ぐーぐー」「むにやむにや」

相も変わらずお隣は騒がしい。見られている気がしたのは気のせい。か。辺りのコンクリートに顔らしき汚れがあったのかもしれない。時折羽貫軍曹が寝言で「弘中さん、無事ー」や長田軍曹の「しりとりしようぜー。俺からスタート。アダムスキー型円盤」「コイツ馬鹿じゃね?」等と言う声が掛かる。その声に頬を張られるのを覚悟で毎度返すと、案の定管理官が僕を叩きに来る。真っ赤に染まった手。むしろ、僕らよりダメージが深いかもしれない。

「羽貫軍曹や、長田軍曹はさ。どうして僕と話してくれるの?」

僕が話し出すと、営倉の管理官は何かを諦めた様に、「5分だけだぞ。5分だけトイレに行ってくるからな。別にお前たちの為なんかじゃないからな!」と残して本当にトイレに行ってしまった。長田軍曹が「ツンデレだ」と言い、頭を叩かれる音が連続する。

「んー、何でって、勉強教えてもらえるじゃん。俺勉強したくて軍入ったからさ」

羽貫軍曹が答え、

「親父の言葉でな。頭の良い奴についていくと、意外とおこぼれが貰えると言われていてな」「長田は黙れ、俺たちの評判が下がる」僕の質問そっちのけで喧嘩を始めてしまった隣の営倉。苦笑を漏らしながらレポートの作成に戻ろうとして、

——頭が良いというのは、辛い事を我慢できたかどうかの差だと思うのですが……。

頭に直接響く彼女の声。懐かしきグリングの声。脳を焼かれて死んだ、彼女の声。

身震いするほどにリアルな幻聴が僕に語りかけてくる。

——どうも、お久しぶりです。私が誰かわかりますか？

頭に思い浮かべる。脳裏に浮かびあがる言葉は、

——グリング？

——はい。

——僕、疲れてる？

——幻聴だと思われるなら、私に訊いても無駄かと。

この言い草、確かに記憶の中のグリングと同じ。声もそっくり同じように感じる。聞こえているわけがないのに、感じる。少しハスキーな、それでいて高い少女の声。

——君は、本当にグリングなの？

——正確にはグリングの思考をベースに、記憶をアナタに頼った電脳幽霊とでも言うべき存在です。

訝しげというのも変だが、問い掛けた僕にグリングが抑揚のない独特のペースで返す。

——混乱していると思われるので、説明しても？

頷く、ような反応を脳内に返す。正確には電脳から繋がっている箱へ。

——私は電脳との接続実験によって脳を焼かれたのではなく、私の思考回路を箱の生体素子に焼付けの際の余波を受けて、脳が焼かれただけです。その後私の思考回路が付属された箱を、遺言通りに

小田切博士がアナタに届けて今に至ります。また、今まで私が表層化しなかったのは、アナタの記憶。より正確には電腦に保存されるバックアップに私が登場しなかったからです。先ほどの頭の良い人という発言から私を連想したアナタによって電腦に一次記憶として私のデータが

営倉管理官が戻ってくる。そして皆が静まっているのを見てやれやれと一息吐き、用意されていた椅子にどっかり座った。

——記録された為、そのデータを復元、使いまわす事によって、私の声。及び私についてのアナタの記憶から私の思考回路と照合。復元された、オリジナルとは違う私を箱に記録し、今アナタと話している次第です。

——オリジナル？

——雛形に経験という刺激を与える事によって人格が形成されます。今の私はその出来上がった人格を模倣しているだけであり、私と違う経験を積んだアナタではオリジナルのグリングになり得ません。

——でも、僕の記憶の中のグリングとまったく同じだよ？

——アナタの記憶から再現されたモノですので、それ以外ないかと。

そう言つて箱の中のグリングが押し黙る。にわかに箱がぶうううんと唸りを上げて何かを起動させる。

——私が、なぜ、ココに入つたか訊かないのですか？

何も起動しなかった。その代りに、妙に平静を保っているかのような、機械にはありえない感情のようなものを感じた。もしかしたら、グリングは感情を理解した機械という都法もないモノになっているのかもしれない。

——聞かせてくれるな、聞きたいよ。

——そうですか……。そうですね。そうですね！ 何たって私天才ですから。天才が何故このような蛮行に至つたかを知りたい、それは人として当然の事でしよう！

グリングが素の部分を出し、箱の中で何かが高速回転している。

先ほどよりも強く強く。何かが始動するのかと思ったが、思えばグリングというプログラムが既に起動している。つまるところ、今箱に掛かっている負荷はグリングが何かを高速で計算しているということになる。計算で出来た感情が高ぶっているせいかもしれないけど。

——昔、小田切博士が唐突に私たちにした質問を覚えていますか？

——答えられてはいけない、っていうアレ？

——夫が死んで妻がお葬式を開いた。そのお葬式の時に夫の同僚とその妻がいい感じになった。それから暫く経って、妻が息子を殺した。なぜ？

そんな質問があったことを、確かに僕は覚えている。今でも時折思い出しては、なぜあんなことをしたのかと考える事がある。

——小田切博士はペアの一人一人に紙を渡して、一つだけ答えを書きなさい。そう言って紙を配った。なのにアナタは二つの正解を答えた。紙に書かれていたのは、「皆さんが僕に求める答え、わからない。邪魔だったから。殺したかったから」そして、「皆さんが答えて欲しくない正解。逢いたかったから」そう、アナタは書きました。それを見た小田切博士は吹き出して言いました。「正解。このクイズは答えちゃいけないものなんだよ。このクイズに答えられてしまった人は皆、何かしらの猟奇事件を起こしたと言われているだが、この答え方の場合はどうなんだろうなあ！ ナハハハハハハハハ！」心底楽しげに笑う小田切博士と、慌てた様に目配せをする研究員。特にアナタの担当だった常盤さんは見物でしたね。顔を真っ青にして、どうしてそんな事を書いたんだって、アナタに詰め寄って。

クスクスと僕の脳内にまやかしの笑い声が響く。響く。堪え切れないとばかりにグリングが笑う。壊れた様に、虚ろに響く笑い声。クスクス、クスクス。

——その時私はアナタに嫉妬しました。

——嫉妬？

唐突に響く声に、本当に驚きながら問い返す。

——嫉妬って、何でまた？

——はい。アナタは、私以外の皆は知らないのですが、小田切博士はその答えを出す子供がいる事を望んでいたんですよ。まともな思考回路の天才は幾らでもいる。だが、そいつらでは怪が何たるか、その本質を見つけられなかった。だったら壊れた思考回路を持つ天才がいたら、どうなんだろう。小田切博士が漏らしたその言葉を、私だけが聞いていました。私たちは人間兵器となるべく育てられました。作られました、ですね。人間兵器とは何か、小田切博士が欲している存在です。私たちの存在意義は、私の存在意義は小田切博士の望むモノになり続ける事でした。私は勉強をする事ができます。賢くなる事はできます。だけど壊れる事はできない。そう悟ったんです。恐らく、その時の私は悟ったのでしょう。だから私は今、ココにいるのだらうと推測する限りではありませんが、だからこそ私はアナタに嫉妬した。のでしょうね。博士に選ばれるのはあの時点でアナタに決まりかかっていました。私は選ばれない。ならばココで黙して廃棄処分されるよりは、私が嫉妬したアナタが如何なる存在となるのか。ソレを見届けるが為に私は、私の脳をコピーしました。そして、小田切博士の道具の道具になる事にしました。とどこどころ私の脳からコピーした情報が欠けていて、推測が混じりました。が、コレで正しいはずですよ。

グリングと僕は赤いコードを通して繋がっている。

話の最中のグリングからは言い知れぬ嫉妬を感じ、小田切博士への崇拜を感じ、そして涙の味とも言うべき感情を味わった。舌の上で消えぬ、脳裏に直接流れるその悲しみはいつまでもいつまでも僕の脳で再生され、反響し、そして心の奥深くに沈殿した。

——僕は壊れているのかな？

何を今さら、とばかりに箱が唸りを上げる。

幽霊 二（後書き）

なんか良い区切り見つからなくて、大分長くなってます。ごめんなさいです。あと感想欲しいです。一人でつっぱしてるんじゃないかね？
コレ本当は面白くないんじゃないかね？　って結構不安です。

幽霊 三

『6月14日。長野県旧天竜区での怪との戦闘について。

上空から見ていた限り、突然の怪の行動に東中司令官が——中略。
今回出現した怪の特性としてまず、兵力を温存しておくということが上げられます。親が攻撃を受けると中から親の体を食い破って出現する方法は、実際にそういった生物も存在しますが日本には存在せず、よって彼らは第三の進化を始めた可能性があります。環境進化と適応進化に続く新たな進化、仮にココでは戦術進化と呼称します。今回の怪がとった戦法は従来のもものと異なり、伏兵という概念に当てはめる事が可能です——中略。

怪が人間の手法を学習しだした可能性があり、今後からはより人間的な運用を企てる可能性もあり——中略。

また、戦闘中、蜻蛉型二匹が深手を負った後も、考えてみれば深手を負う前にも、旧天竜区の地形を観察するかのような言動が確認されており——中略。

まとめとして、今後の怪の動向には20年間の常識が通じなくなる可能性があり、兵法と陣地の見直しを今一度されたし。

弘中和人』

弘中和人のまとめたレポートを興味深そうに読んでいる人物がいる。

事なかれ主義の副司令、戸田清である。彼は時折ふんふんと頷きながらレポート読み、その傍らで雑務をこなしていく。時計の針は午前3時を指し、東中基地司令はとつくのとうに就寝しているが、特段気にした風もない。東中基地司令の無能を支えているのは戸田清副司令の活躍が大きい。滅多に表立たない為「事なかれ主義一徹」のイメージが強いが、どちらかというと縁の下の力持ちの役割が大

きい男である。

戸田清は細身の体をくねらせ、腰を回してコリをほぐしてから雑務に戻る。その際にふと物思いに耽ると、東中基地司令が大好きなゴルフの予定をスケジュール表に混ぜた。そして経理の書類を出すところに判を押し、次いで弘中和人と赤目の行動についてまとめた書類を出す。そしてそこに「エアコンを導入」と達筆なようできて下手糞な文字を書き、判を押す。

恐らくこれから先、東中基地司令は人間兵器の彼らを目の敵にするだろう。公費で足の治療費が出ようが、自分の無能を棚上げにして魔女狩りを始めるに違いない。そうなる前に東中基地司令のご機嫌をとりつつ、さっさと彼らに金を使ってしまおう。少なくとも東中基地司令よりはこの基地にとって有用である。

事なかれ主義を貫く男は、波風を立てないようにしながら物事を回していく。

基地の六割の人員は人間兵器に対して興味はあるが近づくず、二割は敵視し、一割は行動に移す。そして残った一割が、弘中和人達にとって得難い味方であった。

敵対勢力 一

敵対勢力

6月の後半から梅雨に入ったらしい。外ではじめじめと雨が降っている、そう営倉に来る面々が口ぐちに言うのだ。その頃になつてようやく僕と羽貫軍曹らは営倉から出され、今まで通りの部屋に戻った。

エアコンが導入されていた。

ソレを確認した瞬間、僕と赤目は無言で互いの頬を張り合つた。そして夢ではないことを確認した後、互いに「エアコンという文明の利器について」とことん話し合った後、どっちが先にスイッチを入れるかで喧嘩となつた。

そこでも更に一悶着あつたのだが、他に起こっていた変化の方が大きく、そちらは割愛させて頂く。

起きていた大きな変化。

明確に僕らを敵として攻撃をしてくるグループが形成されていた。佐々を中心とした彼らは総数2000。基地内部には3000人がいるから、およそ3分の2が敵になつてしまつたようだ。なぜ数が分つたかという、御丁寧に血判書を僕らの部屋に届けてあつたからだ。名を連ねてはいないが、東中基地司令が絡んでいるのは間違いないだろう。むしろ、そう言つた事を考慮して1000人が敵対しないでおいでくれた事が幸運か。

4日間で2回ほど便所に連れ込まれてしこたま殴られた。赤目と離れた瞬間の事だつた。彼女を頼らなければならないのは情けないけど、頭脳特化は健康を保つのに必要最低限の運動しかしていないから、筋骨隆々まで鍛えた彼らには歯が立たない。殺されなかつた事を幸運と思うべきだろうが、恐らく幸運ではなく必然だろう。

基地司令が敵に回っているのに、殺せない。つまるところさらに上の指示で僕らの安全に配慮しろという指示がきている。そう僕は

考え、折れた奥歯を吐き出しながら立ち上がり、便所を後にした。

「大変だよねえ。ま、頑張りなよ」

老医が僕の奥歯の型から差し歯を作ってくれるらしい。老医は酒田という方で、「俺は中立だからさ。お偉いさんの前ではけしからんけしからん言っけどね」と笑いながら言った。それから彼らの動きやすいエリアを教えてくれた。お蔭で次の日からそのルートを外すことによって襲撃が激減した。

差し歯を入れてもらった日の夕食。赤目がどんよりとした顔をして広間に現れた。首筋や手に包帯を巻いている。どうしたの、と聞きたいところだったけど、羽貫軍曹らが座るより早く反人間兵器派が僕らの周りの席を囲った。ぐ、とつまりながら部屋に戻った時に訊こうと思い、味噌汁を啜ろうとした。

横から倒れ掛かってきた兵士——佐々の所為で味噌汁はおろかご飯と漬物まで床に落ちた。赤目が目を見開き口を開こうとしたが、その隙について赤目の盆も同じく下に落とされる。赤目が盆を落とした男に猛然と掴みかかろうとした。

「わざとではないのだろう?」「そうであります!」「ならば赤目二等兵、席につけ。共同生活だ。こういう事もある」

ありえない。仕組んであったとは思えない。東中基地司令が遠くにいる僕らに向かって、わざわざ拡声器を使って声を投げてきた人に使われる為に作られたモノとして、何も言えない。

頭を掻いた僕は、床に落ちたご飯を手で掴んで食べ始めた。それを見て周りが、2000人が大笑いするが、気にせず黙々と食べていると、やがて赤目も習って食べ始めた。体力の無駄だ。無駄無駄、落ち着け。

ぐしゃり、と僕の前に足が落とされた。佐々の足が飯粒を糊に変えるようにグリグリと動かされる。やがて退かされた足の下には、泥やゴミと攪拌され混在してしまったご飯があった。

「申し訳ない。足が滑ってしまいました」

食べるよな、という目で僕を見ている。無論食べた。そして吐き出した。食物の味ではない、人糞か何かの味と臭いがする。大笑いしている2000人。なるほど。全て計画尽くか。ならば部屋で食べたいと言っても無駄。トッブが敵なのだ。黙って食うより他にない。赤目も咳き込みながら食べている。腹をくくり、口を開けた。

風呂は時間帯によって入るグループが決められている。今までは赤目は最後に一人で入り、僕は羽貫軍曹たちと20時頃入っていた。グループが変わり、僕は佐々グループになり、赤目は他の男性グループに入れられていた。その事に対して「流石に風紀が乱れる」と赤目だけは別のグループにいれようと酒田医師達が動いたが「人ではないモノに乱される風紀なし」と退けられてしまったらしい。

どうやら、死なないラインまでは徹底的にやられるらしい。

5回程溺れた事は記憶しているが、その後は失神してしまった為よくはわからない。けど妙に体が痛いし、なんだろう。お尻に違和感があるような……。痛い？

赤目はその日から風呂の時間中逃げ出すようになった。正しい判断だと思う。

ただ、途端に部屋にこもった臭い。汗や汚物やその他諸々の臭いが立ち込めるようになった。息をすると空気ではなく個体を飲み込んだような錯覚に陥る臭い。赤目は何度も何度も謝ったし、僕は何度も何度も気にしてないと言った。身の危険を感じて程なく僕も風呂から逃げるようになったしね。

箱に繋がるとグリーンが「生きていると大変ね」等と軽く茶化して言ったが、メールフォルダに送信者不明、無題で地図が送られてきていた。丁寧に山越えのルートが書き込まれ、頑張れば食事の後の自由時間で行って帰って来られる地点の天然温泉のようだった。

——ありがとう。

グリーンは答えず、箱がぶううんと唸りを上げた。

結論から言えば、そこにも妨害が入った。佐々達が入り口でた

むろしているのだ。赤目がいる今なら強行突破も可能だと思ったら、全員が特殊警棒やナツクルを装備していた。流石にこの人数は無理、と赤目が静かに首を振った。あからさまにしょげている。薄汚れた迷彩服。垢の溜まった体。

どん、と背中から誰かに当たられた。

羽貫軍曹らだった。

羽貫軍曹らまでが敵意に満ちた目で僕らを見ている。残り1000人いた中立派もほとんど寝返ってしまったのかもしれない。羽貫軍曹らは放心している僕と赤目を長田軍曹らと一緒に囲むと掴み、佐々達の方に引きずりだした。それを佐々達が面白おかしそうに見ている。

投げられる。もうどうにでもなれ、という感覚だった。どうせ使われる為に作られた。ならばこういう風に使われても、いいんじゃないか。それがむしろ、本来の用途ではないか。そんな気さえしてくる。

僕と赤目が佐々達に捕まる。

「うおらああああ！ 死ぬーああああ！」

突如猛然と走り出した羽貫軍曹達が僕らにタツクルをした。

――背後にいる佐々達ごと。

「今までさんざん威張り腐りやがってえええ！」「ちよ、落ちっ」

佐々が静止に入るのもお構いなしに僕の肩をむんずと掴むと、羽貫軍曹が猛然と走り出した。隣では赤目を担いだ長田軍曹らが並走している。何が起きているのか今一つかめない。

「おっと滑った」

わざとらしくそう言い、ズデーンとこける羽貫軍曹と長田軍曹。

突如基地の塀近くに放り出された僕らが呆然としていると、

「うあああ足を挫いた追いかけれそうにない！ 佐々あ、急いでくれ！ こいつら逃げちまうよ！」

と羽貫軍曹がゴロンゴロン転げまわって追いかけてきた佐々達の足に突っ込んだ。予期せぬ攻撃にもんどりうって転がる佐々達。

——なるほど。

頷くと僕は立ち上がり、転んでいる赤目の手を引いて起こすと後ろを振りかえらず「おのれ羽貫！ 覚えていろ！」と叫びながら駆けだした。赤目がまだ何もわかっていないので、助けてくれたんだよ、と言つと、花ほころぶ様に微笑んで、涙の筋を作りながら頷いた。

高さ3mの塀の前に、僕が屈みこんで手を組み、そこに足をかけた赤目を放り上げる。塀の上の有刺鉄線を鉄板入りの軍用ブーツで器用に潰しながら、塀に足をかけて2歩登った僕の手を赤目を取り、そのまま後ろに倒れ込むようにして塀の外へと落ちた。落ちている途中で赤目が大勢を変え、僕をお姫様抱っこするようにして着地した。

「んっ！」

と息を漏らしながら衝撃を逃し、ついで僕を降ろす。それから先は僕が道を知っているので案内しようとして、あぜ道に落ちて転んだ。

敵対勢力 二

「その沢を登って行くと多分、つかれる位の水深がある筈」

グリングが僕に見せた地図を思い出しながら、赤目の後について歩いて行く。

「ピクニツクみたいですネ」

「いや、脱走に近いよ。というか脱走だね。帰ったら営倉を覚悟しなきゃ」

そうなんですか、と赤い目をまんまるにしながら赤目が問う。それに僕は頷き、

「冷静に考えたらやるべきじゃないんだよ。やれるわけない、って本当は思ってたけど、できるようならやっぱり行きたかったしね。基地内の監視カメラの位置は全て覚えてあるから何とかなるかな、と思ったんだよ。でも、今回みたいに羽貫軍曹達が大暴れして、目撃者多数で勝手に基地を出たら脱走だよ」

「なら、どうして出たんですか？ その場で戻っても、別に、良かったのに」

赤目の声のトーンがどんどん下がっていく。それに笑い声を一つ上げてから、

「気持ちが嬉しくて。嬉しくて仕方が無かったんだよ。赤目を巻き込んで悪いと思ってるけど、それでも、嬉しくて。こんな人たちの為なら死ねるって、そう思うほど嬉しくて。だから銃殺刑も何も覚悟で今向かってるんだよ」

「銃殺刑、ですか」

「うん。でも大丈夫。赤目は頭脳特化の誇りにかけて守るから」
守る、の辺りで赤目が藪に突っ込んで転んだ。それに手を貸して起こすと。

「……私も、銃殺刑でいいです」

と赤目がそっぽを向きながら言い、また歩き出した。

「コレ以上一人にされるくらいなら、いつそ死んだ方がいいです」
ずんずんと少し歩く速度を上げて、赤目が言う。
「まるで死ぬために身を清めに行くみたいですね」

グリングが僕に示した場所はぬるい源泉が湧き出している、天然の温泉だった。温度は人肌より冷たく、それでもグリングが往復の時間を計算して導き出した最高ラインなんだろう。そう思うと嬉しくてしうがなかった。こんなに良い気持ちを持って撃たれるなら、それはそれでいいかもしれない。

――が、問題が発生した。源泉が湧き出していたのは森の中、微かに開けた場所で、深さは50cmほど。半径2mほどは温かいが、他は水という立地条件。帰りの時間を考えると、どんなにゆっくり入っても5分が限度。

吐きそうになったため息を殺して、僕は「赤目が入って。僕はそこから辺で水浴びしてくるから。ほら夏だし風邪もひか」「一緒にいいですよ」月明かりの下、真っ赤になった赤目があたふたと手を振りながら、「時間ないですし、一緒に入っちゃいましょう？　ほら！　着ていた服をタオル替わりにすれば、恥ずかしく……ありませんから」真っ赤になって言っても説得力がない。僕がありがとう、とお礼を言いながら沢を降りて行こうとすると、どんと腰に軽い衝撃。そしてそのままグルンと投げられて浅い温泉に突っ込んだ。

「いいって言うてるんだから、いいんですよ！」

赤目がそう言いながら自分もザブンと、靴さえ脱がずに温泉に浸かった。硫黄臭くもないし、ただのお湯かもしれないけど、こういうのは気分だ。投げられた態勢から身を持ちなおそうとしたら、赤目が僕の右手を掴んでまた湯中に引きずり込んだ。泥が舞い、やがて流されていく。

「私はあ！」

「うん」

立ち上がる事を諦めてお湯の中に浸かっていると、赤目が真上に

鎮座している三日月を見ながら叫ぶ。

「自分の事を人間だと思ってます！」

「うん」

跳ね上がったお湯が赤目の肌を滑って行く。顔から滴り落ちるお湯が月光を浴びてキラリと光る。虹色に光る。

「戦って死ぬ為に作られました！」

「うん」

赤目の細い肩が震える。

「誰かの時間を守る為に死ぬなら、いいかなって思ってたんです！」
「うん」

つられて声も震える。

「なら何で！ 何で私たちは死ぬように、平時で死ぬように追い詰められてるんですか？」

決壊。

滂沱。

流れ出す、溢れ出す涙が落ちていく。止めれず、止まない雨のよう
に、ただ溢れていく。溜め込まれ膿んだ感情が溢れていく。器を
壊さないようにと、流れていく。赤目が泣いている。うわああ、う
わああああ！ と森に木霊する声で吼えている。生まれた意味を見
失った人間が、必要とされない兵器が哭いている。赤子よりなお下
手糞に泣いている。感情全てを哀に染め上げられた人間が、啼いて
いる。助けてくれと。助けて欲しいよと。どうして私なんだと。ど
うしてこんな人生なんだと。何故生きているのかと。言葉無しに、
尋ねてくる。

無意識に右手に力こもる。

倍の力で握り返される。

そつと肩を寄せた。

寄り添われる。

月が照らす。

僕と赤目。

二人を。
人を。

敵対勢力 二（後書き）

次、キリ悪いので少し長くなるかもです。

敵対勢力 三

もう五分なんてとうの昔に過ぎた。そんな時間を赤目と二人で過ごした。

月が大分傾き、その中央の王座を他の星に明け渡ししている。赤目と僕はどちらからというでもなく立ち上がって、赤目を先頭に帰り道を辿り始めた。赤目は目を腫らしながら心ココにあらずと言った風に歩き、僕は黙って赤目に着いて行く。繋がれたままの手が温かさを伝えてくる。生きてるよ、と。

基地に着く大分前からやけに排気音が聞こえてくるなと思っていた。

堂々と正門から中に入ると、そこには慌ただしく出撃用意を済ませ、基地から飛び出していく人の群れがいた。騒ぐ声を聞いていると、どうやら熱源反応や電磁波が出る等の予備兆候なしに怪が出現したらしい。場所は前回と同じ旧天竜区。

「行かなくちゃ」

赤目が死に際を見定めて部屋まで走る。後を追うように僕も走るが、とてもじゃないが追いつかない。やっとこさ部屋に着いたと思ったら赤目がすれ違いで銃ケースを抱えて飛び出していく。既に着替えまで終えていた。僕も部屋に入り、扉も閉めずに着替え始める――と。扉が閉まり、中から施錠される音がした。総毛立ち己の迂闊さを呪いながらズボンを履き振り返る。

戸田清副指令が何枚かの紙を持って立っていた。一枚には僕らが出撃出来ない事を確定づける書類。捺印は東中基地司令。二枚目は僕の電腦についての考察。三枚目は赤目という人間兵器の詳細資料。「少し、君と話がしたい。いいかね？」

僕の返事を待たず、垢が人型に残っているベッドに腰掛ける。そして僕に着替えるように促すと、自分は書類をまた眺める。

着替え終わると戸田清副指令が書類を三枚とも僕に渡してきた。

「前回の怪との戦闘時。なぜ東中基地司令の無線だけが故障したのか不思議に思ってたね。独自に調べてみたんだよ。驚いたね。そして笑った。小田切博士は君に特大のプレゼントをしたわけだ」

話を聞きながら書類を読み進んでいく。書類と言うよりはレポートに近いそれを読む事でわかること。それは僕がハッキングを行った場合何物も止められないということ。無機物機械的な信号だけがやり取りされるネットにおいて、生物の思考回路を持つウイルスは想定されていない。つまり、ウイルスだと関知できないのだ。1と0の世界に10進数も100進数も使えるモノが、恐ろしい程の演算能力を持って現れたらそれはネットにとってのエマージングウイルスだ。

「恐らく君を止める手段を小田切博士は持っているのだろうね。でなければ、私ならこんな機能を君に持たせない。君がいれば軍でもなんでも思いのままに操れる事になってしまうからね」

赤目についての詳細資料をざっと見る。

「——出生体重2900g。以後経過良好。但し、精神面において多少の課題が残る。赤目に限った事ではないが、視力を一度以上失う経験をした個体は異様に人との繋がりを求める傾向にある。視覚閉鎖実験時においてはひたすら仲間の名を連呼し続け、それが返らなくなると熱を求めて這い回る。同じ検体が死亡した時に、熱を失っていく様に恐怖を感じた為と推測される。また、視力を失っている状態においては皮膚感をゴムに似せたモノを人肌程度に温めて渡す事によって、ある程度の満足を得るようであり、視力を失っていた時にはそれに対処した。以後、同様の事態に陥った場合は——中略——以上。備考として、何らかの成果を残した際に頭を撫でるや、体への接触を行う事によって、以後の成果が安定する。精神面については以上であり、続いては搭載している機能について——」

赤目があの夜、愛おしそうに語った思い出とは、何だったのか。やり場のない空しさを抱えながら読み進んでいく。

「……え？」

「そう。彼女は戦闘用の個体ではない。あくまで偵察用。見る事に特化した人間兵器だ。戦闘用ではないとはいえ、そういう運用も出来るように作られたらしいがね。わかるだろう？ 全速力で走りながら2300m先の目標を狙撃できる。左目は倍率変化。右目は三次元画像を脳内に投射……人類が普通に行っている事を片目で行っているが、どちらかというと未来予測に近い面があるね。戦闘時の敵の挙動察知と絶対当たる弾が撃てる能力。コレが彼女がライバルを押しつけトップに居座った力だ」

「……どうして、この書類を僕に見せたのですか？」

戸田副指令が手を伸ばす。その手に書類を乗せると胸元に引き寄せ、その中から一枚を取り出す。

「その一枚がある限り、どうせ僕らは戦場に出られないのに。基地内で腐っていくだけの僕らに何をさせたいんですか？」

「——私は東中基地司令より書類を受け取った。確かに受領した。だが、」

東中基地司令の捺印がついた、僕らの出撃を認めない旨を書いた書類を、真ん中から破り、さらに半分に、半分に、小片に変え、バラバラになったそれを床に置いてライターで火を点けた。

「残念な事に私は書類を紛失してしまった。さて、君に一つ確認を取りたい。かつて、怪が予兆を出さずに出現した事があった。それは何と呼ばれている？」

「第一次東京怪災」

無形が現れた、初めての戦闘。大きな戦いが怒る予兆。

「正解。だが、当然君も知つての通り、起こる確率は30分の1だ」
東京怪災、名古屋大阪怪災、信州奇行種怪災、それらはあわせて7回。予兆なしで怪が現れた総数は日本だけで210回を超える。
扉が外からノックされる。ぎい、と一音残して戸田副指令が立ち上がり覗き穴から外を見る。

「赤目二等兵だ。暫し待っていただく」

そうして僕に向き直る。顎に手をあて、研いだように細い顎に生

える無精髭を撫でまわしてから、

「私はかれこれ二日間寝ていないに等しい状況だ。これからうつかり指示の送り間違いをするかもしれない」そう断り、「弘中和人軍曹特別指揮官に伝達。これより5時間以内に東中基地司令が帰投しなければ真田三尉、赤目二等兵と共に戦場に急行しろ。そして万が一の場合にはその使命を遂行しろ」僕は敬礼を返す。すると戸田副指令は非常にわかりにくいが、微笑んだ。ような気がする。踵を返し、内側の施錠を外して驚く赤目を退けて部屋から出ていく。

外の新鮮な空気と共に赤目がしゅんとした様子で部屋に入り扉を閉めた。忘れることなく施錠。

「連れて行ってもらえませんでした……」

たははと笑う赤目が視線を下に落とし、書類の燃えカスを見て訝しげな顔をする。そして僕に向き直り何があったのかと目で問い掛けてくる。

「5時間寝ておけつてさ」

そう首をすくめ、ベッドの上に置いてある箱に手を伸ばす。赤いコードを伸ばしてジャックに差し込み、接続。案の定メールボックスには現在進行形で戦場の動向が届けられていた。場所は前回と同じ旧天竜区。ここからなら40分あれば着く。一次隊は既に到着しているらしく、スターライトスコープと電子タトウを装備した後散開し、既に怪を撃滅したとのこと。怪は飛行型の生物種不明が一体、これまた夜空を飛び回り、まるで確認するように地形を観察していたとのこと。

東中基地司令が到着後はかつて作られた陣地の整備入り、時折ふらふらと現れる飛行型の殲滅が続いている。怪はきっかり1時間毎に現れ、攻撃を仕掛けるでもなく辺りをうろつき、黙って殺されるはつきり言って奇妙だ。まるで信州に突如現れた奇行種のような人間に反応せずひたすら土を掘っていたあれらのような……。

——あのオッサン、前よりは陣地のとりかた上手いね。

——東中基地司令のこと？ なんでも教本引っ張り出して勉強し

ていたらしいから。

—— そうなんだ。

グリングがどうでもよさそうに返す。前回よりはマシだが、やはり隙が多い。怪がどこに出現するかわからない以上あまり固めてもよくないと思うんだけど。でもまあ、この陣なら天地がひっくり返っても中々全滅はしないだろう。ただ硬い。そこに機関銃。盾も矛もある。

—— 旧時代の兵器をさっさと処分して、次代のモノを使えばいいのに。

グリングがどこからかダウンロードした兵器のリストを並べる。目に移る青い幻視に苦笑しつつ、

—— 彼らに使われた場合が怖いからね。自分達が100%防げる武器までしか出さない方が安全だからね。万が一まねられても。

—— でも、

—— 万が一は誰だって怖いよ。死に直結する万が一なら余計に。

—— でも、仕組みは変わっても攻撃方法なんてあまり変わりませんよ。コイルガンや超電磁誘導砲なんかも、精度や威力はぴかーですけど、結局は打撃になるわけですし。

—— 極論だよ。それに銃撃と呼んだ方がいい。打撃にしてはややインパクトが強すぎるし、

—— パンチだけを打撃と言う訳じゃないですよ？

—— よし、オーケー。ココで第37回徹底生討論を始めようじゃないか。

—— アナタの知識しかないのだから引き分けに決まってるでしょう。あ、動きありました。

ぐぬ、と呻きながら意識をグリングが持ってきたファイルに向ける。現在時刻は午前2時37分。戸田副指令に指定された時刻まであと4時間13分。

まず東中基地司令の帰投は間に合わない。なぜなら、今回は何を持って撤収とするかの基準がないからだ。10日も20日も怪が出

なくなれば撤収するだろうが、まず4時間ぼちじや帰ってくるわけがない。戸田副指令だつてそれはわかつてる。

チチツと赤いポイントが旧天竜区の地図上の一点を示す。

——怪がここからしか現れていません。お蔭で新しい塹壕は全てそこを基準に作られています。妙ですね。誘導されているような気さえます。

——だけど、怪の現状までの戦闘方法なら問題ないよね。

——現状なら、という言い方。わかつてるならズバリ思えばいいんですよ。アナタの知識を元に私も推測したわけですから。なんか仕掛けてきますね。

——一時間に一匹現れる怪をゲーム感覚で倒す程、現場も緩んできたようだしね。

——抵抗しない、動物的ですから。

また一匹飛行型が出現したらしい。どうも見た事ない形状をしているらしいが、現場の兵があまり上手い描写をしてこない。6本足、複眼、細長い。蜻蛉ではない。わかるか！

——コード繋いだままにしておくから、何かあったら起こして。

——了解。

コードを繋げたままだと仰向けには寝られない。うつ伏せのまま目を浅く閉じるとそこには闇。緊急時の為点けばなしの電灯も気にならない。

午前5時48分。

——応援に駆け付けた部隊と手柄の取り合いしてますよ、浅ましい。

脳にビリリと声が響き、一瞬で意識が覚醒する。電気ショックで起こされたのと同じだ。あまり良い起こし方とは思えないが、頼んだ手前仕方ないし、これ以外に彼女が僕と意思疎通を図る方法も無い。

——まあ、確かに、確実に消耗ゼロで取れる手柄だからね。

——誰かさんのお蔭でおった負債を失くしたいんでしょね。

——誰かさんは自分の所為じゃない、他の司令官ご愁傷様って言うてる。

——可哀想なのは現場の兵士ですよ。東中司令官はちよいちよい仮眠を取ってるようですけど、現場はローテンション組んで何とか回している状況ですよ。あ、報告の所に「豚死なねー」かな。後ろから撃ちてー」って。相当フラストレーション溜まって来てますね。

——1日も経ってないのに、忍耐がない。

——報告の兵隊さんは基本東中基地司令と一緒に仮本部にいるじゃないですか。なんか面白い話しろとか無茶ぶりがけっこうきたらしいですね。とりあえず全部脱げてなんだよ！　って日記に書いてますもん。

——ハッキングしてるの！？

——覗いているだけです。今やココは私の世界。不法侵入は彼らの方だと訴えたいくらいですよ。

呆れて声もでない。元より出していないが、何かドッと疲れた。

二次応援部隊も現着。

山梨基地からも応援が到着。

包囲網が周囲3キロ毎に4つ。厳戒態勢と言っていいだろうし、投入されている人員は1万人を超えただろう。

午前6時59分。やや遅れて怪が発生。報告を見ると同時に部屋にノック音が響く。赤目が飛び起き、梯子を使わずに下に降りてきた。僕が先に出ていたら間違いなく衝突してたぞ。いや、彼女なら回避しかなない。

赤目は目を爛々と輝かせながら、僕がベッドから立ち上がるのを見計らって鍵を開けた。敬礼をする僕らに真田三尉が頷き、黙って歩き出した。正式な許可を受けていない出勤だからだ。忙しげに動き回る兵士たちとすれ違うが、彼らは僕らが出撃できないとしらないらしい。大手を振って行こうとは言わないが、ココまでこそこそのする必要はないんじゃないだろうか。そもそも僕らの存在意義から

して戦場に出ないという事自体が異例で異常で異質なわけだから、コレで平常に戻ったと言う事で。赤目に手を引かれてはつとすると同時に目の前のジープに鼻からぶつかつた。

どうやら僕も緊張しているらしい。赤目がしつかりして下さいよとばかりに僕を半眼で見るが、彼女も時折苛ただしげに首を振っている。

ジープに乗り込み、シートベルトを締めると唸りを上げてエンジンが始動。お世辞にも滑らかとは言えない動きだし。僕は黙って箱を抱き締め、赤目は銃ケースを膝の上に置き撫でている。真田三尉が煙草を吸い、窓をあけて吸い殻を外に捨てた。真田三尉も疲労が激しい。僕らの事で彼にも何かあつたのかもしれない。

「現場に到着後、君たちは俺と共に怪が出現しているポイントから後方3キロに設置されている野営地に待機。質問はあるか？」

何もない。

あぜ道で一度大きくバウンドするジープ。

敵対勢力 三（後書き）

次から始まるよ？

敵対勢力 四

野営地の近くに放棄されているビルを赤目と共に登り、屋上付近から戦場を観察する。現れている怪はなるほど。形容し難い姿をしていた。外殻に覆われた姿は蟲に似ているが、色々なモノが混ざっている。6本の足が細長い胴体から伸び、尾は棘に覆われ、三角形の顔は複眼に覆われている。背から生える羽は異形。蟲の体格には見合わない程大きな、歪んだ翼。体長は7m程。典型的な索敵タイプと言えない事もない、が……。

そもそも、今まで怪は群れて行動する事がほとんど無かった。その為、索敵タイプと分類はされど、何故索敵を行うかはわかっていなかった。

29階まで階段を上ってきた真田三尉が僕らに下で配給されているらしい朝食渡してきた。おにぎりが2つにパックに入れられた味噌汁と、固形の栄養剤。なぜ頑なに味噌汁に拘るのだろうかと思いつつながらパックの口を開き、熱を冷ましながらおにぎりを口に運ぶ。具は梅干し。赤目は梅干しが苦手らしく目をイーっとしながら食べている。

塩味がガス欠気味だった体に染みてゆく。味噌汁をすすり、錠剤を呑む。

体が動く。そんな感覚を噛み締めていると、さらに真田三尉が僕らに電子タトゥーを手渡してきた。電子タトゥーはシールのようなもので肌に貼る事によって微弱な電波を発し、本部に生体反応を送るという品物だ。基本的に戦場に出る時、全員がコレを胴体に貼っている。手足は千切れ跳ぶから、と電子タトゥーを渡された時、教官に皆が教わる事だ。

午前7時37分41秒。

そろそろ次の怪が出るかもしれない。双眼鏡を目に当て、倍率を100倍に上げる。怪が出る予定地点に目線を合わせ、首筋に片手

でコードを突っ込む。

——片手間はいけないと思う。

グリングの声を聞き流して現場の兵士の無線機に割り込む。通信を疎外しないように気をつけながら音声を僕と赤目、真田三尉の無線機に送る。インカムから『早く交代してえ』『眠いなあ、どうせ攻めてこないし帰っていいかなあ？』『殴って目覚ましてくれ』『パン！パン！ドム！』『ぐえ！』『殴った方が起きるべ？』『ギヤーギヤー』と言い争う音。双眼鏡の倍率をさらに上げる。互いの頭を叩きあっている3人組を発見。怪発生予定地点から北西に15m地点。塹壕の中にはロケットランチャーも見える。辺り一帯には既に赤外線探知機も配備済みだ。

怪はやはり、唐突に現れた。

酷く、醜惡な姿をしていた。

体は百足、名には劣る18対の脚と、顔。

ギリシャ彫刻の様な人間の顔が、血の気の無い顔が、一つ、ついていた。

——人間型！？

わからない。インカムからも『おい、アレ顔にみえねえ？』『飛行型じゃないんなら殺しやすいな』『口もごもごいってんな』『口が動く。』

口が開く。

声が出た。

『……タ、イムリ……ミット』

インカムから確かにタイムリミットと聴こえ、次の瞬間発砲音が連続。人面百足の体中に穴が空き、緑色の体液が噴き出る。楽勝オー等と勝どきが聴こえ、トドのように体を揺らしながら東中基地司令が戦果を確認しに出てくる。油断し過ぎた。司令官が前に出るなんて、何を考えてるんだ！東中基地司令が前進命令を出す。後方

待機の320名が動く。

怪はやはり、唐突に現れる。

あ、と思った時には全体が出ていた。
数えるまでもなく、多いなと思った。

インとインカムが鳴る。

次の瞬間、野営地にいた全員が、インカムで音を拾っていなかった者までが、人間の頭蓋が内側から吹き飛ぶ音を聞いた。

『ア、アンノウン多数！ 現在確認できるだけで飛行型23……24、27か！？ 地上を動くモノ40？ ビルの陰になっていて正確数不明！ 円陣の様なモノを組んでいる！ 繰り返す！ アンノウン多数！ 東中基地司令並びに680名の電子タトゥウから反応消失！ 死ん、だのか？ あんな一瞬で680人が？ 夢なら覚め』

——人類の歯車が狂ったのはいつか。

——この後生きる人類は答える。

——2043年、7月2日。

——全世界規模で正体不明の幽霊が大量に発生。それまで出現報告が無かった海からも出現し、世界は幽霊に阻まれ意思疎通の出来ない小さな世界へと逆行した。

『敵対勢力、規模、能力不明！ 総員配置につけ！ 歴史に名を刻む戦いが始まるぞ！』

敵対勢力 四（後書き）

さて始まりました。立ち上がりが糞遅い私にしては早くないかな？
誰か褒めてーw そして叩いて、感想、超待ってます。

正体不明 一

正体不明

僕たちは戦闘が始まり、一方的にこちら側が負けたのを見届けた瞬間に階段を駆け下りていた。グリングが指揮権は山梨基地の司令官に移りました、と冷静に告げる。

反芻する。

飛行型は1時間置きに出現していたモノと同型。飛行型は1種類だけだったが、地上に散らばっていたのは少なくとも4種類がいた。中央に鎮座していたゴツゴツと丸いだけの真っ黒な怪。その周りを囲んでいる水風船に足を付けた様な奇妙な怪。奇妙な色で、ピンクに近いが決定的に何かが違う。名づけるなら、人肉色とも言うべき色合い。胴体に複眼を大量につけた蜘蛛型。背中に筒のような形状を持つ8本足の何か。それぞれ黒と緑色の体躯を震わせていた。蜘蛛以外、コレだと言える、近似している生物を僕は知らなかった。平均体長8mの一団が躍動する音が聴こえる。

『山梨基地、副司令官権田だ。これより全指揮権は東中司令官より自分に移る』

インカムに強制介入される声。グリングが衛星から現在の動画を僕の目に映す。階段から転げ落ちない様に気をつけつつ動画に意識を集中すると、富士宮基地より東に2キロの位置にいた山梨基地の隊員が動き出していた。倍率を上げていく。およそ400人が中央通りを駆けて行き、路地ごとに分散していく。まずは囲い込むつもりか。怪が全員東を向き、やがて進みだす。のろのろとした速さで、その実数十キロの速さで。

インと音が響く。衛星映像では先行していた30人程が身を震わせ辺りに赤い物をまき散らしながら倒れた所だった。

——生体反応ロスト。どうやら400m圏内はあの音で即死するらしいですね。

インカムには怒号が混じり始める。権田司令官が叫び、包囲を諦めて牽制射撃を始める。意に介した風もなく、蜘蛛型が接敵。2匹を仕留めるが、数が違い過ぎる。徐々に撤退していき、後ろからはぞくぞくと応援が駆けつけるが、削られる人数の方が多い。

『名称統一！ 飛行型をサテライト、蜘蛛型をノーム、筒をキャノン、水風円をボール、丸いやつをエン！』

とりあえずの名前にしても、もう少しマシなものを付けた方がいいと思う……。そう考えているうちに一階に到着。富士宮基地野営地を目指して駆ける。

サテライトが行動を開始する。バアーッと初期地点から放射状に広がり、至る所で超音波じみた音を上げる。

——発声器官！？

するとノームが這いずる様にしてその場所、塹壕に接敵し、人10に対してノーム4と言った割合で戦闘を仕掛ける。瞬く間に勝敗は決し、もはや駆逐といつていい速度で事を運び、煮炊きの火が引火してごうごうと煙を発している山梨側野営地を襲った。あの超音波はどうやら伝令らしい。怪はどうやら個体で動くを止め、群体で動く方へとシフトしたらしい。いや、軍隊で、か。アレは組織されている動きだ。

——サテライト47、ノーム32、キャノン5、ボール7、エン1。総数92。

過去にあった最高数45を大きく越している……。4万の民間人と2万の兵を殺した数の2倍。アンノウン多数。とてもじゃないが、前線3000人程度でどうにかなる数じゃない。

——ノーム損耗2、総数90。権田司令官の生体反応ロスト。

「和人さん……」

赤目が呟いた。

僕は頷き、深呼吸を一つ。焦るな、落ち着け。拳を握りしめる。

『上位二名の指揮官が死亡したと確認された為、富士宮基地所属、特別指令権を預かる弘中和人軍曹が指揮を執る』

一瞬静まり返り、やがて回線がパンクするような速さで『どうしてお前がココにいる！？』『俺はきかねえ。こんなやつ命令なんざきかねえ』『おら、進むぞ野郎ども！根性見せてやろうぜ！』『弘中さん……！』『止まれ！1700名がものの数分で壊滅だぞ？』『突っ込むな死にてえのか！？』『落ち着けお前ら！』『ダメエがな！』『うるせえつつてんだ』

全員の無線の入力を切り、受信音量を最大にして叫ぶ。

『黙れ！』

直前に察知してインカムを外した赤目だけが難を逃れ、真田三尉は一瞬グラリと揺れ、富士宮基地の兵員1200名が忘我した。

『文句があるのはわかった。黙れ！前回と違って既に司令官二名が息絶えている。わかる？死んでいるんだ！死にたくなかったら黙ってという事を聞け！そしたら生きて帰してやる！』

「和人さん、音量……」

「……しまった」

だが効果は観面だった。野営地を駆け抜けながら全員に撤退指示を出すと、7割が素直に従って撤退準備を始めた。怪は2キロの距離など無いに等しい速さで接近してくるだろう。現に上空ではサテライトが8匹、編隊行動を取りながら鳴いている。

『納得いかねえなあ』『佐々の声』『人間兵器様は東中基地司令殿が直々に一筆書いた紙によって、基地待機の筈では？これは軍規違反だ！アンタに指揮権が移る前に軍規違反を犯している！無効だ、こんなものは無効だ！全員目を覚ませ！アイツは俺らを殺す為にやってき』『そう思う事で君が幸せに生きられるなら、死ねるならそれでいいさ。僕を、戦いを勝利に導く為に作られた兵器を信じられる人間だけ指示を聞け。聞き分けのない子供をたしなめる時間も、叱りつける猶予も既に無い』

僕と赤目が乗り込むと同時にジープが動き出す。それに遅れる事数秒で最初の装甲車が動きだし、やがて動きは加速しついには全体が撤退を開始した。流石に7割が消えては佐々として無駄死にだと理

解するしかなかったのだろう。軍用列車も緩やかに動きだし、乗り遅れた兵が慌てて取っ手口に捕まり仲間に引き上げられている。装備も何も置き去りに、僕らは撤退を始めた。

人は群れている時は恐れを感じず、孤独を感じた瞬間に恐れる生物だから。

「基地に帰投しますか？」

「今ここから富士宮に行っても、迎撃準備も何も間に合いません。怪はついてきてる？」

「後方役2キロ。徐々に距離を引き離してる」

「了解。なら怪を引き離れてこのまま西へ向かいましょう。大阪を最終迎撃防衛ラインとします」

「正気ですか！？ その先には天皇もいらつしやるんですよ？」

「もちろん正気です。それにコレは賭けなんです。怪の限界行動範囲は約3000？です。そこまで逃げ切れれば、自然と怪が自滅する可能性もありますよ。速度、5キロ落として下さい。じゃないと怪を振り切ってしまう。中間地点にいたら後続部隊に怪の誘導を引き継いで、僕たちは地下輸送手段で一足先に大阪まで向かいましょう。迎撃準備を整えます」

列車の操縦者から何処へ向かうのかと伺いが来たので、愛知方面に向かえ、と返す。ある程度まで行けば、JRの残したレールも使える筈だ。機械制御でレールの切り替えは出来るが、果たして線路が生きているかどうか。

正体不明 二

「前方7キロに怪！」

——前方7キロ地点から間隔を東西に3キロずつあけて怪！

赤目とグリングが同時に叫ぶ。脳内に残響として残る音を噛み締めながら、衛星写真に目を凝らす。

「A1からC5まで先行。機関銃で前方の怪の殲滅ないしは足止めインカムから返る返事に頷きながら地下輸送手段を使えるように上層部に申請。搬出口は愛知県名古屋市を指定。次いで怪を確認し出した一次防衛ラインに連絡。先の戦闘で得た情報から機関銃ではノームさえ仕留めるに至らなかった事。迫撃砲等を使って迎撃をしたというポーズを見せたら撤退して良い事、むしろ撤退しろ、と指示をとばす。

——サテライト52、ノーム50、キャノン8、ボール10、エン1。総数121。前方の個体は無形で上空を囲い出した為認識出来ず。

「前方の個体新種です。百足の胴体に頭が人、07:00時に現れたモノと同型です」

「先行班B3だ、射撃を敢行したが無形の霧に阻まれて弾丸が届かない。いや、弾丸がどうなっているかはわからないが、届いてないのは事実だ」

——弾丸が届かない？ 無形は金属の塊だけど、そんな……。物理的な攻撃力が低いから攪乱に努めていたんじゃない？ 機関銃の連射を止めるんて。

「B3、弾丸は止められて落ちたのか？ それとも消えたのか？」
「わからない。霧が濃くて、百足野郎も見えなくなってきたいるが、ほぼ全ての弾丸が消えた様に見える。時折欠片らしきものが落ちてくるんだが、それもスグに消失する」

まさか、そんな馬鹿な。だけど、事実だとしたらなぜ無形が、金

属が動くがわかる。その性質の多様性にも説明がつく。

『A1、C5！ スグに現場から離脱しろ！ 西側へ抜けて怪の群から離脱、敵はアセンブラ、ナノマシンだ！』

『アセンブラ？』 『ナノマシン？ 医療用だろ？』 『攻撃に使って、範囲狭いだろ？』

『棘状に組まれたナノマシンは理論上破壊できない物は存在しない。群体だから霧に見えるが、あまり時間をかけると接近されて食われるぞ。敵は血管をすり抜ける』

——なるほど。確かに無形が単体で出た事はありませんね。すると、あの百足がアセンブラの制御機関でしょうか？

——議論をする余地はないよ。防衛ラインを張っている意味がない。最強最少の敵から身を守れと言われても、どだい無理な話だから。スグに撤退指示を、

——いえ、第一次防衛ライン破られました。生体反応7割消失。向こうでもアセンブラが出現。戦車が消えてしまったそうです。

ほぼアセンブラに間違い無い。最強の矛と最強の盾を併せ持つモノが敵。西に向かつていて良かった。もし万が一北東を目指していたら、偏西風で運ばれたアセンブラに食われていたかもしれない。僕が報告している情報に軍上層部はがたついていらしい。幾つもの指示が飛んでは打ち消され、新たな報告でまた騒ぎが生じる。

——アセンブラの発生地点は何か所？

——4か所です。何体の司令官がいるかわかりませんが。それと第一次防衛ラインにおいてあったパソコンからデータを持ってきた。一団に指揮を出しているのはエンと見られるそうです。暴走して気ままに走ろうとするノームを西へ西へと誘導しているらしく、また非常に強力な超音波を発する事が可能です。

——電子レンジかな。

——人の頭蓋を蓋として、水分子を高速移動させているわけですか？ 人間の6割が水分、脳みそはその中でも特に水の比重が多いですから。

数キロ北側に霧が見える。アレがアセンブラとその仲間だろうか。

——怪警戒地域抜けました。現在の怪の総数は121+ α です。事ココに至ってようやく上層部から第二次世代までの兵器の使用が許可された。だけどそれでも、20年前の技術だ。そんな物で怪の大軍をどうしろっていうんだ。

——単純に考えましょう。威力が大きくなっただけで、実際には斬撃と打撃の違いくらいしかないんですから、最新兵器を使っても良い。と言う考えで上層部に上申を。

——したよ、粘りに粘って第二次世代まで。コレ以上先の兵器になると、防御手段が確立されていないものも多いから。危険すぎるっていう判断だろうね。

コレ以上になると実弾は亜音速級に入り、レーザー等の兵器に趨勢が移っていく。残念ながら敵に使われた場合、止められる手段は存在しない。レーザーにしても熱線と光線の二つがオーソドックスだけど、両方を防ぐのは難しい。亜音速まで速度が乗ったら、gでクレーターが出来る威力だ。そんな物を学習されたら、日本どこか世界に対して脅威となる。

額から汗が滴る。それを腕で乱暴に拭い目眩が起こる程の速度で頭を回す。

考える、絶望に支配されるな、冷静に頭を回せ。打開しろ。この閉塞的な状況を打開しろ。お前はその為に生まれた。考える、考える、考える、考える！

——名古屋、搬出口準備完了しました。

『愛知第一次防衛ラインだ。怪の誘導を引き受ける』

「真田三尉、速度を上げて下さい。名古屋搬出口に到達し、大阪に向かいます」

了解と真田三尉が返し、にわかに速度が上がる。後続車両にも同様の指示を出し、引き継ぎの愛知第一次防衛ラインの車両を追い越す。通常より多少硬い程度の防衛ラインじゃ足止めにもならないと

いう判断から、全部隊塹壕を捨てて車両に乗り込んでいる。

——大阪まで下がって、籠城戦でもする気ですか？

——単に時間稼ぎの面もあるけど、怪の優位点を一つ削りきる。

——出現場所が正確にわからないことですか。それと、大阪までに怪が力尽きるというのは自信アリの考えですか？

——……ボールは恐らく、支援専用の怪だ。怪は既に大阪でもぬけの空の街に遭遇している。今回の怪なら、同じ轍は踏まない。

——現在の日本陸軍は総数5万8千人。怪の出現場所が不明の地域では50人で一体の怪を相手取りますが、確かに怪が来る方角と数がわかっていれば対策は練れますから兵は少なくてすみますね。単純計算でいったら、五千人が必要ですし、敵の怪は明らかに今までと違います。

——出現場所不明でやったら100名いても無理だよ。そんな状況にならなきゃ、兵は出せないけど。

——5万8千人を数時間内に集める事は不可能ですよ？

——限界まで迎撃能力を上げていくけど、現在のままの状況ならもって2日。以後は突破される。

でも先ずは、陣を構成しなければ。でなければ津波の様な怪の大軍に磨り潰される。

航空戦力投入の要望が通り、百里基地から爆撃機2機と攻撃用ヘリ7機が離陸した。怪への予想到達時間はおよそ34分後。それまでにこちらは名古屋内の搬出口まで移動出来る。だけど、航空戦力が来ても、恐らく状況は変わらない。機銃の掃射を喰らって活動を辞めた怪は二匹。圧倒的に火力が足りていない。爆撃を至近で落としても大してダメージを喰らわない可能性さえある。いや、それ以上に怖いのは、キャノンとサテライトに航空戦力を削られる事。爆撃で致命的なダメージを喰らいそうなのはボールだけ。支援用怪を潰せれば僥倖だけ——

——！！！！

——どうしたの？

そうグリングに訊ねつつ、グリングが見ているページに意識を飛ばす。

「——う、そだろ!？」

大阪に怪36匹が出現。全体奇行種、即時に行動を起こす可能性は低い。その文字を幻視した。冷や汗がどつと噴き出す。切り札、伏兵、戦術的な予測、そうだよだって、怪は既に来るという事を示しているんだ。そう語ったのは僕だったのに、こんな人間的な手法で来た時の事を真剣に考えていなかった。段階を踏むと甘く見ていた。今回の怪の目的は都市進行じゃない。日本の防衛戦力を極限まで削るつもりだ。

現在軍は西寄りに基地を置いている。それは日本の首都が九州に移動した所為だが、それはつまり東北に進行しても怪にはメリットが少ない事になる。悪い言い方だが、いざとなれば切れる土地なのだ。いくら進行できてもせいぜいが岩手秋田止まり。既にその辺りの土地は荒れ放題となり、人もほとんどいない。だが、怪が西に進行してきたら人類側は守らざるを得ない。正体不明の怪の嵐、まずは様子を見ようとする。すると迎撃ラインは初期地点+100?から怪の行動限界と考えられている300?までに置かれる。ならば、それらの少し後ろの、全てが集約する大阪付近に怪を置けば、簡単に挟撃が出来る。そして中途半端に集まっている防衛戦力を叩く。全滅はさせなくても良い。三割削れば、防衛ラインは築けなくなる。五割削れば、要所の防衛さえ出来なくなる。

正体不明 三

——大阪に現れた怪は、ノーム18、サテライト18、総勢36です。

やはり主力は先に出た一団か。救いがあるとすれば、富士山から離れて出現すれば、出現するほど怪に異常が発生するということだが、それは本当にアテにして良い情報なのか？ 考えろ、思考を止めるな、脳を回せ。

——百里基地から出撃した航空隊全滅。キャノンは対空砲撃可能な怪です。迎撃可能距離は五？、威力は対戦車ライフルと同等。命中精度は六割、ただしサテライトの哨戒範囲に入った場合は九割まで命中精度が上昇しています。哨戒半径は三？。

——なるほど、絶望的だね。低高度巡航ミサイルと超高高度巡航ミサイルに認証が降りた。駄目元で撃ってみる。

五分後、低高度ミサイルは無形の霧に突っ込んだ瞬間爆発し、その衝撃全てを霧にぶちまけ無にし、超高高度ミサイルも同じ末路となった。アセンブラとしての驚異的な分解能力が無くとも、無形は基本的に金属の小塊だ。一所に密集されればミサイルも吹き飛び、細かすぎる彼らは破壊されずに蘇る。無形の霧は既に半径二？に展開。どれだけの量がアセンブラかわからないが、もしかしたら全てかもしれない——絶望に吞まれかけた心を、鼓舞し立ちなおらせる。

——グリング、

——はい。

——お願いがあるんだけど。

——はい。

——僕の電腦を一度精密スキャンしてくれないかな？

——了解。精査開始します。ですが、なぜ？

「名古屋、着きました」

真田三尉がこちらを振り返りながら言う。赤目もこちらを見つめ

ている。後続車両がどんどん到着し、後数分でレールの整備状況上迂回せざるを得なかった軍用車両も到着する。

——ココが恐らく、今回の戦闘の分水嶺。

今ならまだ、指揮権返上も、僕の死を持ってすれば間に合う。だけれど、でも、今僕の頭の中に鎮座しているソレを実行すれば、誰よりも上手く、今回の戦闘に限って兵を生かせる。そうなるように小田切博士が設計した。そしてそうならないように小田切博士がストップパーを付けた筈。

——精査完了しました。異常無し。

——ありがとう。次に安全装置の項目を調べて、制御ないしは停止の欄を調べてくれない？

小田切博士は一体幾つ仕掛けた？ 僕を即時無力化できる罠を、幾つ体の中に張った？ 電腦に一つあるのは間違いない、後はどこだ？ どこにある？

——項目発見。ですが何故、自分で調べず外部装置の私に？

——自分で調べられないブラックボックスがあると、何となく予想していた。僕が以前電腦を調べた際には、制御項目は208、停止項目は28。 greeningには幾つに見える？

——制御項目301、停止項目56です。

予想よりも大分多い。コレを止めたら、何かが、万が一があった場合僕の脳は焼き切れるのかな？ でも、どうせ外さなくても、僕が実行に移せばオーバーヒートで脳を焼かれるんだろう？

——それらの項目の照会を行う。そして、僕に表示されていない項目の全てを切断してくれ。

——照会開始。

「真田三尉、赤目、車の外に出よう。車両を放棄して一旦地下に入る」

言いながらも脳内には数多の数字記号漢字文字が飛び交って行く。その項目に入った瞬間、僕の脳内には合致する項目が無くなった。それを頭の中に感じながらもインカムで指示を出し、全員が車両の

外に出た。到着した軍用列車組も即時指示に従って車両を降りる。既に開いている、五m×五mの大きな穴、搬出口に向かって歩き出す。斜め30度の角度で地下に潜っているそこに足をつけ、滑らない様に気を付けながら手すりを伝って降りていく。誰も僕に質問をしない。何をしようとしているのかを、訊こうとしない。それは信頼ではなくて、理解できていないだけで、それじゃ意味が無い。

——紹介完了。

三十mも下って行くと、数百m×数百m、資料によれば320m×120mの一次階層に辿り着いた。ここは地上に物資を出す前に一度貯め置いたり、中で整理が出来るように作られたフロアだ。LANの強さが跳ね上がり、回線を通して僕はある物呼び出した。到着予想時刻は七分後。

重々しい音を発てて搬出口が閉まり、一瞬暗闇になり辺りがざわつき、次の瞬間主電源が入って眩しい程の光りに照らされた。

「状況は——」

音が空間に吸い込まれる。魂さえも奪われるような錯覚を感じて、半呼吸何も言えなくなった。

「極めて悪い。大阪に陣を築いて怪を迎え撃つ作戦だったけど、もうそれも出来ない。大阪にも怪の大軍が発生した。富士と大阪から僕らは挟撃を受けている。学習して欲しくはなかった、人間を学習しているのはアセンブラの様相を見ても明らかだと思う。敵は戦術を理解し、都市を狙うのではなくまずは防衛戦力である僕らを殺しに来た」

その声に直立不動だった兵たちが僅かに態勢を崩した。横目で互いを確認して、自分たちが今、何なのか、どうなっているのかを確認しようとしている。

20年間戦争は続いている。何も得る事のない戦争が続いている。犠牲者は出る。兵は小学校教育までしか受けていない。軍に入っ最初習うのは規律と道徳だ。錬度は下がり続けている。ざわつく彼らを睥睨し、インカムの音量を少しだけ上げた。

「だけど、もし、君たちが協力してくれるなら、僕は勝ちを約束する。この中の九割の命を保障する」

ざわつきが収まる。何を言っているんだと、全員がこちらを見た。怪一匹あたりに、何人が必要なのか解っているのかと。

「命令に従え。そしたら生き残れる。最初の命令だ。僕が次の命令を出すまで動くな」

——グリング、やってくれ。

全員が僕を見ている。

——了解。

キチ、と目に暗い影が入り込み、すぐ横にいる赤目が識別できなくなる。

暗闇。

赤目は、この世界で何日過ごしたのだろうか。

音のみが異様に響き、やがて音も遠ざかる。

触覚が薄れ、味覚が消え、平衡感覚が狂い、恐らく倒れた。

鼓動の音を感知できなくなった。体温が消えた。脳のみが知覚によつて存在を訴える。ああ、人の心は脳にあるのか。何を感じなくなつても、脳が作る感覚の世界に僕はいる。自己を保て、生身の脳を信じる。

——電子脳幹ver1,20再起動。

唐突に世界が戻ってくる。触覚が戻りべたつく汗を感じ、聴覚が戻り静まる世界を感知し、視界が戻つて世界を見る。口の中はカラカラに乾いていて、鼓動は五月蠅すぎる。

——脳の機能の二割がダウン。私が補います。

——ありがとう。次に僕の体のどこから、微弱な電波が出てないか確認して。

正体不明 三（後書き）

地下から物出たり、地下に広大な空間があるのって浪漫だと思うw

正体不明 四

その時、擦れるような音を発てて僕たちのいる場所から20m後ろにソレが届いた。ソレは小さな部屋のようになっており、高さ2m、全長4m、幅3mほどの白いブロックに見えた。

「移動用救急治療室……」

羽貫軍曹が呟いた。

「誰か、手術するんですか？」

「僕を」

——接続骨子のLANとは別に、そのすぐ近くに微弱電波を受信している機関があります。

——他は？

——恐らくないですが……。もしコレを取り出すなら、それ相応の覚悟を。麻痺してるとはいえ、骨に達すれば痛いじやすみません。

——麻酔、使えないもんね。

指揮が出来なくなるから。あと数時間で怪は名古屋を包囲するだろう。衛星からの映像はしずしずと近づいてくる霧を映している。大阪の怪にも動きがあつたらしく、大阪に集結し始めていた部隊への牽制役と名古屋への強襲部隊とに別れたらしい。名古屋に向かつてきているのは主にサテライト。監視の目を増やすつもりだ。

「この中で特殊医療機械を使える人はいる？ 僕の体を切開してある物を取り出して欲しいんだけど」

相変わらず誰も手を挙げない。移動用救急治療室は医師がいなくても手術ができるよう、中に医療用機械が入っている。半オートマチックな彼らには、最初の信号入力者と切除部位を指示する人間が必要だ。最悪自分で自分を縛って、箱の接続端子から医療用機械を繋いで自分で手術するしかない。

「——第一級医療用機械取扱い士、持ってるぜ」

声を上げたのは、佐々。キツイ目をさらに吊り上げて憮然とこち

らを見ている。驚いたのは僕だけではない、全員だ。佐々なら、佐々なら戦場を負けにしても僕を殺しかねない。それほどまでに僕らを毛嫌いしていた男が、何故？

——自分の手でトドメを刺す為か！

医療用機械の取り扱いミスと言えば、どうとでもなる事例だ。これなら自分が処罰されずに僕を殺す事が出来る。

おそらく佐々以外全員が、そう考えた。流石にそれはマズイ、と止めようとした数人を腕で押さえながら佐々が僕の前まで歩いてくる。あと4人、3人、2、1、対面。

「富士宮基地で第一級医療用機械取扱い士を持つてるのは俺と小笠原だけだ。小笠原は基地待機、そしてココには富士宮基地以外の兵士がいない。俺に任せるのが妥当だと思うが？」

佐々が笑う。理は佐々にある。第二級医療用機械取扱い士の免許を持つ者が何人いようと、佐々が班長にならざるを得ない。因縁やそれまでに何があつたかで佐々を外したなら、人間兵器は自分の都合で人員を入れ替えると角が立つ。それはつまり、致死率の高い戦場に因縁だけで叩き込まれかねないと言う事。されなくなったら、命令に従うのではなく、完全に服従しろということになってしまう。出来ない。

それをしたら、今の危ういバランスさえはち切れてしまう。

ならば、まだ、後からくる僕らの仲間の為に、僕だけが死んだ方がいい。

「お願いします。助手は必要ですか？」

「座学も実技もミスなしたった。いらねえ、と言いたいが、万が一があつちゃ困る。笹島、手伝ってくれ。それから赤目、俺らがミスった時の為に一緒に入っておけ。何かあつたら——俺を射殺しろ」呼ばれた笹島も、僕も、赤目も、その場にいた1200人が全員固まった。佐々が自分が医療ミスをしたら殺せ、と言ったのだ。前は弘中和人を殺したいのではないか？ 違うなら、今までは何だったんだ？ 疑念と疑惑に包まれる辺りを無視して佐々が移動用救

急治療室に入って行く。それに数秒遅れて笹島、赤目と順に入室した。

技師は左側にある扉から入り、患者は右側の扉から入る。それぞれの部屋は繋がってはおらず、強化ガラスで遮られている。技師は隣の部屋から医療用機械に指示を出し、患者を切開していく。無菌にする必要があるのは僕だけだ。今その時間はない。僕は土足のまま患者用治療室に入り、うつ伏せに寝台に寝た。

扉が閉まり、気密が安定する。

「なあ、一つ聞いときたいんだけどよ」

「患部ですか？ 首の……接続骨子わきから切り開いて、中にある接続部位、その中とは別に、独立した機関がある筈ですからそれを切除して下さい。神経毒か何かが詰め込まれている筈です」

「了解。手術の前に、一つだけ質問しても良いか？」

「……手短になら」

「アンタら本当に、作られた子供なのか？ 俺らは人工子宮から生まれた設計子供って聞いてるんだけどよ」

一瞬迷い、

「違います。発表ではそうなっていますが、もし僕らが設計子供なら頭脳特化だけで100人以上の子供を集める必要はありませんから。20世紀最大の科学者の細胞も、現在科学を率いる天才の細胞も、選りすぐり集め放題ですから。それをせず、わざわざ効率の悪い数に頼ったと言う事は、それが出来ないと言う事。そして神のみが弾くことを許される、DNAオルガンを人類は未だ完成させていません。他にも僕らが作られた子供だと言う事を否定する事例はありません」

「ならよお、」

佐々が言い淀み、

「アンタら何で、俺らに使われてるんだ？ 使われようとしているんだ？」

笑止。微かな笑い声がスピーカーを通して佐々達に通る。

「そう育てられたからですよ。親代わりにも兄代わりにも姉代わりにも、世話をする人にも会う人会う人に、お前らは戦い死ぬ為に生まれた、それだけが存在意義だ。そう言われて育った。僕らは世界の全てに呪われながら生きてきた。呪いを解くには死ぬしかない。人に使われて死ぬしかない」

「待って下さい！」

治療室の外から叫び声上がる。まさか佐々は内部での音声も外にも漏れる様に細工していたのか？ 何の為に？

羽貫は叫ぶ。

「なら何で、軍上層部はそれを黙認しているんですか？ 大きなプロジェクトなんでしょう？ 隠せるわけじゃないじゃないですか！」

「悪魔が囁いたんだろうね。小田切一馬と言う悪魔が、囁いたんだろ。得る物のない戦争、戦っていればスグに気付く。単体では勝てる相手ではないと。そして相手は進化し続ける。いずれ負ける戦い。そんな戦いを誰がしたい？ アナタの代わりに戦い、戦争を勝利に導く駒を作りましょう。小田切一馬は天才だ。誰が何を欲しいか分っている。相手が頷くしかない、欲しい解答も用意してくれる。それが設計子供、例えば技術が足りないとかわかっていても、信じたがつている相手を騙し切るのはそう難しくない。ただ目を逸らせば良い。書類に踊る真実から目を逸らせば良い。だって皆、わかってた。だろ？ 人造人間なんて作れっこないってさ。僕らは紛う事なき、人間だ」

技師室をチラリと見れば、赤目がM4を胸に抱きながら硬直していた。ずっと欲しかった言葉、ずっと欲しかった確証、自分が人間だと言う証明。唐突にそれを目の前にぶらさげられて、口に含みはしたが飲み込めずに固まっている。

「腕が千切れても元に戻せる技術はあるが、アレはあくまでIPS細胞等を使った細胞養殖に過ぎない。お偉いさんと金持ちが若さを保つために、臓器を入れ替えたりして使ってるアレはゼ口から作る創造ではないんだよ。ところで、そろそろ手術してくれないかな？」

「最後に、」息を吸い、心を静め「最後に一つだけ」佐々が懇願する。

「どうぞ」

「アンタは俺を恨んでいないのか？」

「逆に問います。子供を軍に売ったアナタは、何を恨んでいるんですか？」

技師室で佐々が硬直する。義務教育が六年で終わると言う事は、それ以降は社会人と言う事だ。日本での平均結婚年齢は16歳に下がり、法改正が行われたお蔭で男女ともに14歳で婚姻関係を結べる。

佐々は30代。僕らの計画が始まったのは18年前。僕は16歳。時期はあう。ただの鎌掛けだったのに、思ったより効果が上がった事に僕は驚いた。

「誰だつて気付くよ。軍が子供を買うと言ったから。名前を変えていても、中身は軍人だ。誰だつて気付くよ。軍の中で何かが行われているって。なのに誰も問題だと言わないのは、それだけ日々が苦しいからでしょう？ 生きて行くのが難しい世の中なんでしょう？ 自分以外全ての命が、どうでもいい時代なのでしょう？ そんなあなたたちを守る為に、僕は生まれました」

「違う！」

皮肉って言いきった僕に、佐々が叫ぶ。

「違う！」

大の男が男泣きに泣きながら、叫ぶ。

「違う！」

嗚咽がスピーカーから漏れる。涙が機材に降りかかる。誰も動けない。いつもいやらしく笑っている男が、こんなに透明な涙を流せるとは誰も思わなかったのだ。誰しも、悪魔の存在を見た後に、その中に天使がいるとは思えない。

佐々は泣いている。吠えながら泣いている。彼がどんな人生を歩み軍に入ったか誰も知らない。彼が何を思って生きて来たかを誰も

知らない。彼がどんな思いで子供を手放したかを誰も知らない。

「可愛さ余つて憎さ100倍ですか？」

佐々は答えない。ただ黙つて涙を拭き、手を解してから僕に寝ると合図をする。体をバンドで固定し、頭を万が一にも動かせないように電脳から接続骨子をハックし、機能を落とす。接続骨子は辺り一体の筋肉と同調して起動している為、コレが落ちると生命活動に必要な心肺機能以外全ての筋肉が動けなくなる。

「どうぞ」

息を吸い四肢に力を込める。何か冷たい物が皮膚に触れる。裂く。中に入る。血が溢れる感覚。メスが中に入る。溢れた血が首を伝つて寝台に零れる。あまりにも赤い、紅。

メスが進んでいくと唐突に吐き気を催す様な強烈な痛みが襲つてきた。声を上げる事も出来ない。カツと息を吐き目を見開き口から涎を垂らして、ただ耐える。痛みが背筋を抜け、痛みが筋肉を押しのける。痛みが機械に辿り着き――

「別々の部位に機関は埋め込まれていない」

「なっ――」

ならば、どこに？

「ただ、接続骨子と見られる機械の中に、針を射出する事が出来る機構がある。コレを必要とした事は？」

「――ない。切除は可能？」

「不可能だ。機構が複雑過ぎて、専門家でなければ外せそうにない。ただ、人工的に針の周りを埋めてしまふ事である程度の無力化は可能とみられる」

「完全な無力化は？」

「針の先、毒を出すとみられる部位を塞ぐ事は出来るが、どの程度の圧が出るかわからない。完全と言い切るのは難しい」

「首の内筋に突き刺さる程度、針の長さは最高でも接続骨子内の領域に留まる為、二？。射出圧は恐らく無いに等しい。接続骨子の電源を落とす事によって弛緩している筋肉に刺す為の物だと推測され

る為。塞いで埋めて、できれば先にカプセルでも付けて施術終了」
「了解」

痛みが作業の進み具合を教えてくれる。飛び跳ねたい痛み。首から下は暴れているのに、首は動かない。脳を焼き切らんと迫る痛みは白い光となつて幻視される。耳の中ではロツクのライブが始まり、鼓膜を突き刺す様な音が響く。叫び声を上げたいが喉の筋肉が弛緩している所為で上手く叫べない。眼球が有り得ない程飛び出して目が乾く。

痛みの根源が痛みの森を抜けた。後はじくじくと中身が痛いだけで、施術は皮膚の縫合にまで至っているらしい。痛みで疼く脳をフル回転させてこれからの段取りを確認する。

——行くしかない。

——サポートします。

電腦を再起動、接続骨子が動きだし、首の筋肉がようやく自由に動く。痛みで上手く動かせないけど。絞れそうな程かいた汗をうっとおしく思いながら、手術室から出る。汗だけかと思ったら、軍服は血だらけだった。汗と血を滴らせながら出てきた僕に向かって、誰が始めたかわからないけど、軍帽を胸に抱いて頭を垂れた。

「佐々重正、弘中和人軍曹の指揮下に入ります」「肥立明雅、同上」
「羽貫宏隆、同上」「長田同じく」「百瀬、全幅の信賴を貴方に」
「横田正宗、指揮下に入れさせて頂きます」「東雲詞、同上」「疑つて悪かった笹島」「生きて帰らせてくれ志太」「奈良航大、よろしく頼む」「佐沼新羅、砲撃曹長だ」「第二級医療用機械取扱い士持つてるのに手エ上げなくて悪かった、新聞」「今までの非礼を詫びる三好」

音を吸い込む空間に轟く1200人の声。隣で「アナタを守ります、赤目」と言う声も聞こえる。

やがて止んだ宣誓の最後に、

「必ず君たちを帰還させると誓う、弘中和人」

そう締めくくった。

正体不明の敵は僕らの中の疑念。
怪は見えている。化けの皮を暴いて、勝ちに行く時が来た。

正体不明 四（後書き）

さあ、ようやく立てたプロットが役に立つときが来た！「キラッ
と逆転！」としか書いてないコレが、ようやく役に立つぞ！

決戦 一

決戦

正午――。

開戦から約五時間が経過し、一次階層は慌ただしく走り回る男達で溢れ返っていた。一時間ほど前に応援部隊が地下輸送手段を通じて到着していた。僕らがいるフロアーには約500人が到着し、名古屋各地の一次階層や周辺地域にはさらに6000人程が到着し、総勢7700人の大部隊となっていた。現在の日本の国防戦力のおよそ八分の一だ。

地下輸送手段からはひっきりなしに物資が届いている。それらは全てランク2までの物だが、第二次世代までの兵器はランク2に含まれる。その一つ上のランク3からは戦術を変える威力を持った兵器が眠っている。

全員がそれまでの旧装備から第二次世代装備へと変更を完了した。
「いくよ」

誰も答えない。黙って開くべきハッチを見ている。名古屋市から東北へ七キロ地点まで怪は近づいてきていた。驚異的な移動速度だ。
『本部へ上申――。地上味方部隊への掩護の為に、自動制御機械の砲座及び機関銃の使用許可を頂きたい』

これらはランク3に所属する兵器ながら、怪を怪として認識できない可能性の為に前線から排除されていた機械だ。敵を敵と認識出来ない、そんな事があるなど誰も考えていなかった。会う度に姿を変える敵は完全に想定外だったのだ。

『ICUカメラを通して現場を視認し、頭脳特化が直接制御します』
『――了解。ランク3の兵器の一部を開放する』

ココまでは計画通り。コレで倉庫から通路が開くだろう……。やがて言葉通りに一次階層に送られてきた自動砲座と自動機関銃。人間が操舵する部位が排除され、全体的に丸っぽくなったデザイン。

弾丸は内部に装填されている2000発の他に、レール伝いに銃弾を送る事で補充可能。これは砲座も同様だ。砲座の初期装填砲弾数は108。それぞれ3m程の機械が八門ずつ送られてきた。実際には大した変化もないのに、空間が狭くなったような錯覚を感じる。

——手筈を確認します。最初に発電所、次に軍司令部、続いて地下輸送手段でよろしいですね？

——それでいい。ただ、懸念している事が本当になった場合はプランBに変更。

——本当に、大丈夫ですか？

——今回に限ればね。

暫くの間を置き、

——私なら、この判断は出来ません。やはりアナタは壊れている。怪と言う、進化学習する特性を知らながら……私なら、出来ない！グリングが悔しさ、という感情をこれでもかと僕に流し込む。

グリングが起動準備入り、箱がにわかに機械音をたてはじめる。
『全体へ通達。12:08分に全搬出口を開ける。即時指定ルートを通り、所定の位置まで進み待機。以後は指示を待て』

了解と返る声、何も返さず頷く富士宮基地の兵士たち。現在この場には軍曹以上の尉官は十名程度しかいない。16人で一塊の分隊を曹長に指揮させ、分隊10を一人の尉官が指揮する。余った全部隊は僕が指揮を引き受けた。さあ7分に入った。残り60秒足らずで5時間前に逃げざるを得なかった敵と対面だ。自動制御機械に電源が入り鈍く唸る。搬出口が開き始め、陽光が地下に入りだした。残り10秒。隣を見ると赤目が静かに頷いた。

1200人が、2700人が走り出した。地鳴りを思わせる音を発てて軍靴を鳴らし、近場へ急行するものは一次階層から伸びる細い通路に飛び込み、放射状に散っていく。数キ口を移動する必要があるものは一次階層から地上へと上がるリフトに乗り込み、一度に1000人が上がっていく。そして上がった先には乗り捨てられた車両と軍用列車。

排気音が上がり、列車が軋む音がする。全員が上がったのを確認し、自動制御機械を地上へと発射させる。意識を機械に同化。同時に広がる16の視界。互いに重なりあい、重なった場所は立体として処理し、レールの分岐にあわせて視界は二次元に変わり無限大に増えていく。体がバラバラに別れて走っているかのような奇妙な感覚。一次階層には僕のみが残された。

『A8、所定の塹壕に到着。指示通りC4を設置して撤退する』
『A台作業完了、撤収する』
『B6問題が発生している。所定の線路が使えず、徒歩での移動となった。帰投時間が7分遅れる』
『軍用列車、目標地点の半分に到着』
『G5、怪の大軍を視認。恐らく10分足らずでココまで到着する』
『撤退開始』
『了解』
『赤目、M82での射撃を敢行しましたが、効果見られず』
『機材を置いて撤収。30秒後に車両が通過するから、それに飛び乗って』
『肉体強化の見せ場ですね』
『D1、9、線路の整備完了。撤退します』
『E、確認の結果、大阪から向かっている怪は2割減少。富士方面から向かってきている怪は減少3、いずれもボールだそうです』
『ご苦労、帰投する兵員の為にリフト準備』
『A帰投完了』
『F、土中に熱源探知機を計507個埋め終わった。予定の600には到達しないが、時間になった為撤収する』
『了解』
『G帰投』
『了解、ご苦労様』
『リフト2回目上げます』
『応援部隊、所定の行動を完了』
20分程で一次階層は元の賑わいを取り戻していた。汗だくなった男たちが、次の出動に備えて弾薬の装填を開始した。外に展開している自動制御機械の目から見ると、地平線を覆い尽くすように霧が迫って来ていた。

——衛星写真確認しましたが、やはり地面は分解していません。
——ビル等は？

——いずれも損害なし。アセンブラが喰うのは移動している物のみです。証拠に犬などは分解されて消滅したようです。

——アセンブラ自体は物体の認識が出来ない訳だ。

——ですが、アセンブラの本体。人面百足は確実に認識可能です。

最初にコチラを認識してタイムリミットと言った訳ですし。

——まるであらかじめ期限が定めてあったみたいだね。

——そうかもしれませ、霧が名古屋市に侵入を開始しました。

——確認してる。

砲座と機関銃は一直線上に三つずつ準備されており、最前線に三つ、中央に三つ、後方に三つ構えられている。残りの六つは三つずつ両翼に設置されている。中央に伸びる一本線を外側から覗きこむ構えだ。

決戦 一（後書き）

どこに魔法少女風の変身いれても違和感バリバリだと思っただけで、
どうよ、行くべき？

決戦 二

砲座と機関銃の機械の目を通して見る世界では、白い靄のような物が辺りを包もうとしていた。アセンブラなのか、無形の靄なのか。それはわからない。だが、確実なのは、彼らが砲座と機関銃を兵器として認識していない事だ。通常前線に出ている物とは大きさも形も違う。怪は学習しなければ何もわからない。それはどんな生物だ。って同じだけど、どんな生物にもあてはまらない、されど生物をなぞる怪にも有効だ。

三つの視界にノームが移る。どれも最前線に配置していた砲座だ。中盤までの砲座と機関銃が靄に包まれる。敵の哨戒半径は一？。直径二？にまで伸びたアセンブラを何とかしなければ、そもそも戦いにすらならない。最前線三つの視界に人面百足が出現、中央の一つにもノームを視認。

——グリング、補佐！

——両翼六つを使って攪乱を開始します。

16の視界のうち6つが火を噴いた。未だ遠くに見える霧に向かって砲撃と銃撃が叩き込まれる。最前線の目と中央の目にはアセンブラ全体が波打つ様に同様したのが見えた。やがて波は脈動するように幾度か動き、唐突に二つに分かれた。右翼と左翼の砲撃を防ぎに行つたのだ。そして開ける12の視界。怪の全体を視界に捉え、何匹かのノームが砲座に集まってきた。

「いきます」

6の砲座と同数の機関銃が攻撃を開始。狙いは全て人面百足。確認できるだけで人面百足は16。4つに分かれていたあのグループ1つに平均4体がいた計算になる。最前線の3つが人面百足4体を撃滅。中央の機関銃も秒間80発を吐き出していくが、集まっていたノームを蹴散らすのに時間が掛かり、人面百足への命中は僅か。それでも2対の人面百足が倒れた。やや薄くなつた霧を後方から見

ている目がある。後方3つの砲座だ。砲座は照準を空に向けると、仰角をじりじりと下げていき、やがて砲撃した。砲弾は重力に引かれて弓なりに飛び、敵中央エンを襲った。

——アセンブラ終結。砲弾全てが撃墜されました。

連射しているが、一向に砲弾はエンに届かない。司令官は何が何でも守る所存の様だ。そうこうしているうちに最前線がさらに二匹の人面百足を潰し、中央の銃座も一匹を蜂の巣にした。これで残りは七体。上空からの砲撃を止める為にアセンブラが地から身を離し、上空に集まりだす。その衝撃をモノともしない鉄壁の守り。

ああ、だけどごめんね。計画通り。

「C4を起爆」

ヤーと言残して、機械の目全てが閃光に包まれた。

カメラが復旧したのは37秒後だった。復旧したカメラは後方に設置していた砲座三つ。前方と中央は爆撃に巻き込まれて大破していた。もうもうと立ち込める粉塵。茶色いそれらの中に僅かに垣間見える白色。

——駄目か。

コレで終わってくればそれで、良かった。だが物事はそう甘くはないらしい。

——大丈夫ですよ、死刑になっても電子幽霊になればいいじゃないですか。開始します。

——了解。

グリングがLANではなく一次階層に用意されていた有線を伝って軍内部のネットに沈み込んだ。それを脳の何処かで感じつつ、僕はLANで軍内部の電力供給量を示すメーターページに飛び、そこから関東一帯の電力欄に移る。

「——ああ」

画面越しに見ていたのでは、ただ情報が羅列されているだけだったページ。電腦の海の中では、情報は手に取れる物だったのだ。表

示されている情報を掴み、中に潜る。潜る、潜って発電所と変電所の内部コンピュータに辿り着く。誰も、何も気づかないうちに管理権を全て手に入れ、電力を全て名古屋に集める。次いで不足した電力の付けを軍司令部に向けた。

——軍司令部電源落ちました。……予備電源復旧。予備電源奪取に移ります。

グリングに続いて僕は地下輸送手段の管理コンピュータに意識を飛ばした。全自動の搬入装置は僕の登場を歓迎し、しししざじあいしぎあgはぎあsぎhがいふdhづsgし

——弘中和人か？

誰かが二進数を使って問い掛けてくる。

——まあ、誰でも構わない。例えばお前が何であつたしようと、弘中和人に繋がっているのなら脳は焼ける。

誰だ、誰が電子の世界に存在しないはずの生物にハッキングを仕掛けている？ どうして人の手で、たかが二つの数で、百ケタの数に、千ケタに匹敵——圧倒できる？

——もう少しやり応えがあれば良かったんだけどな。80975k h g r m b h タイプグレーテル停止

……いつまで経つても、停止はやって来ない。電子の海の向こうの誰かもソレに気付いたらしい。何度か80975k h g r m b h タイプグレーテル停止とパスワードらしきものが打たれる。

——ナハハハハハハハ！ お前は誰だ？ 弘中和人じゃないのか？

——いいえ、弘中和人ですよ。小田切博士。

——コレは驚いた。電腦のセーフティを外したのか？ どうやって？ 内部から見たら絶対にわからない物なのに。そして外せるわけがないのに。

——グリングに外してもらいました。

——ナハハ！ 本当に起動していたのか。嬉しいねえ。天晴天晴！ さて、それでは死んで貰うか。

首の筋肉が盛り上がり大動脈をグリリと押した。

「——カッ！」

突然痙攣した僕を赤目が心配そうに覗いてくるが、大丈夫だ。僕は死んでいない。毒針は無力化された。針を打ち出す機構をどうやってあのサイズに入れたのかと思えば、簡単な事じゃないか。接続骨子は首全体の筋肉と繋がっている。首の筋線維を一定のパターンで脈動させて、その動きでもって針を打ち出す。なんともまあ、合理的なシステムだ。

——おや？　LAN接続が悪いのかな？　確かに動いたと思うんだが……。

——ソレも無力化してあります。

——やるじゃないか。さてでは、自力でお前の脳を焼きにかかるとするかな。

唐突に視界に0が踊った。電腦の処理能力が負けだしている！？　竹やりで戦闘機を落としかかっているのか！

電腦のプロテクトの一部が解かれ、能力値が下がる。同時に脈拍が大きくブレ、目眩が襲ってくる。鼻から血が噴き出す、目の静脈が浮き上がる。止まれ止まれ止まれ、何だこのプログラムは？　意識を持った、悪意を持ったこの生物は何だ僕の脳を食み殺しにかかるコレは何だ電子の海を直接知らない人類がこんなものを作り出すことができるのか忘れていた小田切一馬が僕らを作りそして彼は天才だと言う事を——悪意のプログラムは唐突に消え去った。

——軍司令部落ちました。予備電源からLAN回線まで全て私の手中です。

——、助かった。ありがとうグリング。

——？　機械的に申しまして、何の事でしょうか。次、地下輸送手段から武装を引き出します。引き出す武装は？

——水素爆弾、キ口は200でいいよ。

——了解。開発コード名『^{マール}悪意ある（ボル）^{ジュ}炎』呼び出します。搬出口は奈良県奈良市が最も早く射出可能です。到着予想時間は十

二分後。それまで怪は動きませんよね？

——動けないよ。人間の悪意の産物、戦術に晒されてパニックになっっている筈だから。ただ、懸念はあるよ。低高度巡航ミサイルを毎分四発、霧の中央に撃ち込んで。

——了解。こちらは愛知県の県境搬出口を使います。二分後に第一射、三分七秒後に到達します。

「——はあ」

大きく息を吐いた。鼻血は止まっていたけど、かなりの量を出していたらしい。膝の上に置いていた手が血だらけだ。おまけに貧血の気配さえある。頭がグラグラと揺れて気持ちが悪い。

青い顔をしている僕に、皆が注視している。

「ああ。十分後に決着が着くよ。着かなければ、ごめんね。怪は水爆さえ乗り越える化物になってしまったみたいだ」

僕の水爆と言う言葉に皆がギョツとした顔をする。と同時にどこかで爆撃音。低高度巡航ミサイルの第一陣が到達したのだらう。カメラにはアセンブラに飲み込まれて消えるミサイルと爆炎、それから僅かに着弾がずれた一発。お蔭で辺りは猛烈な爆炎を上げている。

——小田切博士の最後っ屁ですね。衛星を二割、一瞬ですが管理権を奪われました。よくまあ、ノートパソコンで闘えるもんですね。先ほどまで起動していたスパコンは私が抑えているってのに。

——天才、だからね。

——そうですね。

なんとなく、グリングが嬉しそうだった。

グラリと視界が揺れて、また出てきた鼻血を感じながら僕を倒れ、誰かに受け止められた。

決戦 三

「大丈夫ですか？」

赤目が僕を受け止め……損ない、というか体重負けして赤目も態勢を崩し、

「大丈夫ですか？」

羽貫軍曹が赤目の手を支えるようにして、倒れ掛かっていた僕を支えた。鼻血が本当に止まらないと思いながら「ありがとう」と言っ
て床に寝そべらせて貰ったけど、羽貫軍曹の横一mで両手を差し出したまま固まっている佐々は何なのだろうか。頭を垂れて手を降ろしたら、他の人たちに肩叩かれて励まされてる？

——着弾まで一分切りました。耐シヨック態勢どうぞ。

『着弾まで60秒を切った。総員耐シヨック態勢』

インカムで全員に指令を出した。流石に軍人手慣れた物で、周囲の壁を使ったり、数人でスクラムを組んだりして各々シヨックに備える。僕もシヨック態勢を取らなきゃ、あれ？ 体動かないや。電脳に不具合が生じてるのかな？ 四肢に力が入らない。あ、鼻血止まった。着弾まで残り24秒。はてさてどうしよう。この打ち捨てられた魚の様な恰好で果たして大丈夫か？ 相手は水爆だぞ？

「大丈夫、です。私が守ります」

僕の頭を抱えるようにして赤目が言った。いつの間に。どうやら意識が少しずつ飛んでいるらしい。これは電脳の一部が完全にイッてしまったかもしれない。

「……鼻血、ついちゃう（ふいふあうひ）よ（おう）」

舌が回らなくなってきた。コレはいよいよ本当に、マズイかな？ 思考もどうにもスローになってきた。

——電脳、異常ありません。

——なら、コレはなん、なのかな？

——機械的に考えまして、首元に仕掛けられていた毒針の除去が

完全では無かった事が原因かと。

——毒か、何毒かな？

眠気と涙でばやけ出した視界の中、世界がブレた。否、揺れている。地響きのような音と地震が僕らを襲っている。砲座のカメラとの接続はとうに切れてしまっている。世界が狭まっていく。一次階層の証明が落ちたかと思うほど暗くなり、音は僕との間に敷居を立てて中々近づいてこない。赤目の温かさだけがいつまでも頭を包んでいた事を覚えている。

広く、どこまで続く空に風切り音が走る。

掻き毟るように、空気の面を断裂させながら飛来する一発のミサイル。三mほどの、小さいとさえ言える兵器はしかして、数さえあれば世界を滅ぼせる威力を持っていた。

奈良県奈良市の搬出口から跳び出された悪意ある炎は、ただインブットされた使命を果たすべく名古屋へと向かう。

射出されてから九分二十三秒、名古屋上空60mで炎の華を咲かせた。

中から漏れ出る様に這い出るようにして溢れる炎が、炎と言う形すら捨てた熱が、一瞬で上空にて編隊飛行を組んでいたサテライト20体を蒸発させた。あとかたもなく、蒸気にして消し飛ばして、炎は次の獲物を探して地上に降り立つ。

熱を受けたビル群は鉛細工の様に溶け出すモノもあり、大半は衝撃で碎け散り吹き飛んだ。倒壊していくビル、舞い散る埃、熱が舐めとりどこまでも見通せる、何も無い空が出来上がっていく。

衝撃波に膝を屈していたノームに、エンに、ボールに、キャノンが、熱に焼かれて消えていく。地面に影を焼き付け、そして消えていく。

本当に何もないように、消えていく。蒸気になっていなくなる。塵さえ残せずいなくなる。

爆発から同心円状に破壊の痕が広がり、だのに空はどこまでも澄

んでいる。

人がここに住み始めて以来、こんなに綺麗な空だったことはない。

決戦 三（後書き）

ところでコレ、ちゃんとラノベってるよね？ お前のソレライトノベルじゃねえよ！ と言われ続ける私なので、若干不安だったり？

決戦 四

水爆の爆発の余韻が消え去った後暫く、誰もが動けなかった。それほどまでに凄まじい衝撃であつたし、身体的以上に心理的に衝撃を受けていた。広いとはいえ密閉された地下空間で爆音に数十秒耐える事は、外で銃撃の雨に晒されるのと同じストレスを与えてくる。赤目がようやく水爆の衝撃から立ち直った時、赤目の腕の中の弘中和人は動きを完全に止めていた。それどころか、呼吸も弱々しい

「和人さん？」

呼びかけるが、反応は無い。繰り返し繰り返し呼びかけ、その度に声を大きくしていくが和人は反応しない。ただ黙ってその身を赤目に任せつきりにしている。赤目が切羽詰った声を上げる度に、辺りの兵がわらわらと集まってきたかどうかしたのかと和人を覗きこむ血が滴る軍服に身を包まれた和人は明らかに顔が青かった。誰がどう見ても、何かしらの不具合が体に発生しているのは明らかだった。「心音、正常」「脈もある」「自発呼吸もある、が意識が無い」「瀬戸際だな。こっから一番近い基地ってどこだ？ 医務室運び込めば助かるかもしれん」「小牧基地だろ。高蔵寺分屯基地は7年前に整理されて消滅したから」

羽貫と長田が赤目の手から和人をそつと取り上げると、担架に乗せて駆け出す用意をした。

「しまった！ 搬出口あいてねえ！」「長田うつさい。担架揺らすな危ねえ」

搬出口の操作は基本的に手動では行えない。全てがコンピュータ操作だ。一定の手順を踏むことで一次階層から伸びている通路の扉を開ける事は可能だが、そちらを使うとなると1200人が全員外に出るにはかなりの時間が掛かる。ましてや別の場所には2700人が待機しているのだ。

そして彼らは慌てて失念しているが、外は水爆の影響で地獄と化している。熱が大気に吸収され、人が普通に歩けるようになるまでにはまだ時間がかかる。

『……こ、接ぞ……く』

インカムで囁くにもあまりに弱々しい声で呟かれた言葉。大部分の兵たちは自分達の怒鳴り声でソレを打ち消してしまったが、茫然自失としていた赤目の耳には届いた。

——箱？ 箱って和人さんの首から伸びたコードと繋がってる？ それを接続？

和人に近寄って「もう一度言つて下さい」和人の口が微かに動くが、周りが五月蠅くて聴こえない。司令官を失くして烏合の衆と化した軍人が、それぞれ思い思いに自分の考えを叫んでいる。否、怒鳴りあっている。

——発砲音が連続した。

音の発生源は赤目の持つているM4。わざわざ旧式の銃を使用したのは、次世代型の銃だと音が小さいからだ。コイルガンに至っては無いと言っても差し支えない。

「少し黙って下さい」

ヤー、と誰かが返した。それを一瞥した赤目に対して、周りの全員は思った。あの女天上じゃなくて俺らに向かって水平に撃ちやがった。威嚇じゃない、殺す気だったぞ。この瞬間、人間兵器という抽象的なモノへの恐怖が、赤目二等兵と言う人物への確固たる恐怖に変わった。恐るべきは人が重なっている場所に弾丸を数発連続で叩き込み、誰にも当てなかった赤目だが。

『箱、を……の、端子をはず……一次階層の、有線に、せつぞ』

今度はちゃんと聞こえた。赤目は担架にうつ伏せで乗せられている和人の首から赤いコードを引き抜き、箱を佐々の手から奪い取って一次階層の端まで走った。一次階層の壁は外すことで内部の端子と接続できる場所がある。灰色の壁の中赤くなっている一か所の壁を赤目は力任せに開け、その端子に赤いコードから伸びるジャツ

クを突っ込んだ。

決戦 五

——ふう、あまり乱暴に扱われると困りますね。

一次階層に設置されているスピーカーを通して、誰か女性の、否少女の声が聴こえた。この時彼らは知る由も無かったが、2700人のもとにもこの音声は届いていた。つまり、この声の主が地下輸送手段の権限を全て持っていると言う事に、軍部の管理権も得ていると言う事に。

——見えないと、どうにもやりにくいですね。

カシン、と何処かで音が連続した。微かに金属が擦れるような音と共に、一次階層のあらゆる所に監視カメラが姿を現し、同時に布状の画面が壁から垂れさがり、電源が入ると同時に少女の姿を現した。

——お初にお目にかかります。頭脳特化、グリングです。

少女は一定ではなかった。これもまた彼らが知る由でもないが、グリングが自己を確立しているのは己が己の脳から持ってきたデータと、弘中和人の記憶からである。そして記憶と言う物は一つではない。怒った記憶も泣いた記憶もあれば、怒っている人を見た記憶も泣いた人を見た記憶もある。グリングという少女は喜怒哀楽が重なりあつた顔をし、来ている服は線が重なり過ぎてよくわからないが、病院の患者服のようだと誰もが感じた。

——誰が話しているのかわからないと不安かと思い、映し出された失敗ですね。皆さんかたまっております。さて、水爆が爆発してから約7分が経ちました。爆破した高度は60m。外部ではまだ粉塵が舞い、場所によっては未だ800を保っている所もあるようです。皆様決して外に出ませんよう、お願い致します。

グリングが映っていた画面からグリングという少女が消え、代わりにカメラの映像で名古屋市の状況が映し出された。同時に入力されている衛星映像を見る限り、怪は消滅したようだった。水爆が爆

発したと思われる中心点から外に向かって放射状にビルが倒壊し、地面に風痕を残している。そよ風を大地を抉る爪に変える程度の威力。

——軍用列車は無事です。ね。流石軍用！ 素晴らしい。ですが、一部のレールが瓦礫に埋まり使用不可能。グレーテルは毒が回って動けない。さて、皆様どうしますか？

どうするって、何がよ。と誰かが言うが、グリングは反応しない。——おっと。音声を得るのを忘れておりました。何か言った方がいらっしやれば、もう一度お願いします。弘中和人を助けるのか助けないのか。

赤目は確信した。グリングという少女は恐らく底意地が悪い。先ほどの間のとり方、かなりの芸達者だ。

——熱源反応弱まっていますね。中心点で400 まで低下。皆様ご安心下さい。口を開ければ肺が焼けたただれだけで即死は致しません。その後は保障しませんが。さて、冗談はここまでにして本題に入ります。この、

画面に名古屋市の地図、それから赤外線探知機やカメラを使って得ている情報が詳細に書き込まれていく。

——東回りに名古屋市へ抜けるルートであれば、瓦礫もなく比較的安全に小牧基地へと向かう事が出来ます。問題は、私とグレーテルの共通見解なのですが、

「質問！ グレーテルって誰ですか？」

羽貫が手をピンと伸ばして声を張り上げた。それをある者は勇者を見る目つきで見、またある者は半眼で見つめた。赤目は無感情に画面を見続けていた。

——そこで倒れている弘中和人の頭脳特化養成時代の検体名です。……ああ。

赤目は思う。

……私、聞いていたのに覚えていなかったと。どうしてだか悔しくて、胸が痛む。別れるかもしれないと、死別するだろうと思って

はいても、実際に直面するとどうしようもなく心が暴れた。思わず泣きだしそうになるのを堪えて堪えて、無感情の檻に自分を閉じ込める。泣いても、和人さんは助けられないから。

——私とグレーテルの共通見解なのですが、恐らく移動中ないしは外に出た瞬間に怪が出現します。今回の怪は非常に人間らしい。人間らしい戦法戦術をとります。さて、富士方面から撤退し大阪を目指そうとしたのに、大阪には怪の大軍が現れ、名古屋市で防衛せざるを得ない状況になったのが今回の状況です。端的に考えまして布陣している部隊の足並みを乱す為には、相手が予想していない場所に敵を作れば良い。つまるところこちらの陣地内。というわけで正確な時間はわかりませんが、そろそろ怪が出現致します。

さて、とグリングは一息ついた。

——グレーテルに回っている毒が何なのかわかりませんが、時間的猶予はありません。見殺すか助けるかを決めて下さい。

『怪が出現する事がわかっていているなら、静観すべきだろう。そうすれば裏をかこうとした敵の裏を取れる』

2700人の直接指揮権を持っている信濃という隊長の声だ。

『敵勢力の規模が不明でその中を踏破するのは危険極まりない。静観し、怪が現れるならそれでよし。現れないならなおよし。コレではどうだね？　そもそも、地下輸送手段を使えばいいのではないか？』

——水爆の権利を奪取して撃つたのは良いんですが、現在日本中からアクセスを狙われておりまして。いつ落ちるともしれない状態です。

誰も何も言わない。冷静に考えれば、一人を見逃して百人が助かる方が良い。だが、相手は人間兵器だ。一体、何人分の価値があるヤツなのかがわからない。そして誰しも、自分は死にたくない。だから停滞した。

赤目を除いて。

——おや？

赤目は銃に弾を装填し、背中にコイルガンを吊り下げ、腿に自動式拳銃を二丁吊った。更に手にわざわざM4を持つと、バックパツクの中に弾丸をこれでもかと詰め込み始めた。総重量20キロオーバーの装備を体に付けた赤目は立ち上がり、

「列車まで運んでくれればいいです。そこまでも、それから、私が守りますから」

そう言つて辺りを見渡す。赤い目が機械的に目の補佐をし、やや暗い一次階層を死角なく映し出す。

「ま、ココは俺でしょ」「俺らな」

羽貫と長田が担架を持ち直す。その後ろから佐々が立ち上がるが、歩き出そうとして立ち止まる。立ち止まった佐々の背を押すようにして幾人かが立ち、担架を担いで歩き出した羽貫と長田の後を追う。「お前、担架運ぶの下手だな」「下手とかあんの!?!」「揺らし過ぎ」等と騒ぎながら歩いていく羽貫と長田に、ぞろりと富士宮基地の兵員が全員続いた。

「まあ、俺らの指揮官様だからな。見殺しはちよつとマズイ」

——良かったじゃない。助かるかもよ。

赤目にだけ聞こえるようにスピーカーを絞ったグリングが言う。赤目が何とも言えない表情で画面を見つめる。不意に視線を逸らすと、次世代兵器と共に送られてきた液体酸素をガブリと飲んだ。戦闘時でもごく少量しか飲んではならない物を赤目は飲み干さんとするよくに煽り、飲み終わったペットボトルをその辺に捨てた。

胃の中で分解された酸素は血管に取り入れられ、爆発的に運動性能と持久力を高めるが、諸刃の剣でもある。酸素は猛毒だからだ。

——言葉通りに守りなさないな。それと、誰かに私の本体運んで貰つて。

途中から音量を戻したグリングの声を聞いて、笹沼が箱を受け取った。

「線路に一旦出て、そこから名古屋駅まで行つて、そこで列車回収してゴーでいいのか?」

羽貫が一番前で叫んでいる。

「戦えるのはお前らだけじゃないって、人間兵器様に示してやろうぜ！」

指揮官を救う為に、指揮官のいない、独立した部隊が動き出す。

決戦 六

一次階層から伸びる通路を進み、途中で何隊かに別れて地上に出た。

——怪がいた。

ノームが数匹、所在なさげにうろついている。思わず叫びかけた奴を、周りの男が口を塞いで止める。そしてジェスチャーで分隊を決めて、包囲に入ろうと——

右足から踏み出した。後は、心の赴くままに。育てられた通りに駆ける。走りながらM4を構え、たむろしているノーム、その中でも最もこちらに近い一体に照準を合わせて撃つ、撃つ、撃つ。目玉は一撃で潰れたが、何発も同じ場所に叩き込む。怪の装甲が弱い場所はどこか。何の事は無い。感覚器官だ。数度痙攣したノームが倒れ、その屍を文字通り乗り越えて二匹が迫る。

相手は7m。私は1m60cm。

相手の攻撃は一撃で私を殺すだろう。ほら、その凶悪な足が私を殺そうと同時に4本向かってきた。頭の中に投影された映像が、私に教えてくれる。右足を一步踏み出し、態勢を左に大きく崩す。ほら、相手の懐に入った。倒れ込みながらM4をノームの眼球に向けて乱射し、弾けたセラチンが顔にかかる。地面に着く瞬間に転がり、衝撃を逃し銃弾を装填連射。残りの怪は一匹。その巨体で私を潰そうと迫ってくる。先に死んだ怪の体を足三本を使って退けて、勢いはそのままに私に向かってボディダイブ。現在の位置から安全圏まで私の身体能力じゃ間に合わない。私は迫る怪から逃げるのではなく、前に踏み込んで怪の腹の下に入った。迫る腹にM4を縦に、つかえ棒のようにして時間を稼ぎ、腿から抜いた二世代自動式拳銃、衝撃無しで威力をアサルトライフルまで高めた兵器でノームの片側の足を撃ちぬく。動き続ける足、僅かに見える間接部位。一本二本、

兇悪な反動さえも利用しながら一回転。もう一丁取り出し、三と四は同時。ノームが向こう側に態勢を崩した。こちらを見つめる巨大な眼球。腹についているソレに向かって自動式拳銃を突きつけて一発二発三発を撃ちながらしゃがみ込みバックステップで立ち上がる。「私を守るから、行こ」

誰かがすげーと言うまで、赤目以外全員の放心状態は続いた。

100人で一匹倒すのがセオリーなのに、位置がわかっていても50人で編隊を組む必要があるのに。赤目はこの瞬間、兵士300人分の価値を示した。担架を守る者達が、人間兵器の価値を知った瞬間だった。

駅の向こう側でも散発的に銃撃音が聞こえる。

怪を倒すのに人数が必要な理由は単純だ。

怪の方が人間より強いから。

より詳しく言えば、赤目のように眼球を狙って撃ち続ければ確かに怪は倒れる。だが、自動車と同じ速度で動く巨体。触れば即死の怪物に向かってソレが出来る人間は少ない。能力的にも心理的にも、だ。だから編隊を組み、徐々に徐々にダメージを蓄積させてから殺す。コレが現在のセオリーとなっている戦法だ。互いが互いの射線に入らなければ、確かにこの戦法は強い。

最初から敵の位置がわかっていれば、だが。

赤目は走る。止まらない。線路と構内の段差を一つ跳びに超え、腿に自動式拳銃を戻しながらコイルガンを背中から引き抜く。長さ50cm程の銃を脇に構え、窓ガラスを打ち抜き体当たりをし、駅前のロータリーの屋根に飛び乗る。衝撃を殺しながら地面に落ち、ながら駅前の道路で猛威を振るっているノームに一撃浴びせる。目に命中。でも死なない。

複眼の一つを潰されたノームがこちらを見、その瞬間別方向から銃撃が襲来。だがノームの目に当たった幾つかは緑の血の飛沫を上げさせるも倒すには至らない。体に当たった弾など、外殻を凹ます程度だ。ノームが赤目から兵士に再度目標を変え、右の前足を振り

一人が捕まりノームが倒れた。駅前を走る赤目の放った弾丸が再度眼球を貫いたからだ。目を突き抜いた弾丸はノームの僅かな脳を粉微塵に粉碎し、ノームに掴まれていた兵士は仲間の協力を得て脱出した。

かなり遠くにノームが見える。遠いが、線路の上だ。

「ん」

コイルガンの反動は恐ろしく小さい。走りながら上半身を固定し左の視界がどんどん拡大され間近にノームの体が見える。右目で見ている視界が脳に投影され、どう撃てばいいかを直観に囁く。走っている時、ほんのわずかに両足が地から離れる事がある。体全てを固定し命中精度を上げ二発連続で射撃。着地と同時にさらに一発。遠くで倒れるノームから視線を外し、味方がついてきているかを確認する。担架を持つ人手を交代しながら、彼らはしつかりと赤目についてきていた。

その事が何とも言えず嬉しくて、赤目はやや乱れた呼吸を整えながら微笑み、さらに加速した。

誰も死なせない。

強い決意は体を動かす、目はどんなに遠くにいようと敵を見つけろ。予見射撃の命中精度は極端に高い。撃つ、走る、走りながら撃つ、列車に辿り着いた。

そこにもノームいたらしいが、先に着いていた別働隊によって駆逐されていた。緑色の血がかかった車両に全員が乗り込みだす。列車が駆動音を響かせ、車体を僅かに軋ませながら走り出した。水爆で飛んできた瓦礫を弾き飛ばし、降り積もった埃を風に撫でられ散らしながら走る。装甲車両と同じ強度を持つ列車。その窓一つあたりに二人の兵士が銃をつきだして警戒を続けている。

赤目は車両の中央にある梯子を上り、車外に出てから辺りを見渡した。目を凝らしては時折タンタンとコイルガンを撃つ。如何せん動きが走りより速く、弾が当たっても横向きに弾かれる事も多くなってきた。赤目が射撃した方向に味方が追従して撃つ。何だか嬉し

かった。認められたと言う事が、嬉しかった。頼りにされているのが嬉しかった。今まで生きてきて良かったと、戦場で思った。きっと私はこの思いを得る為に生まれたんだ、和人さんと基地の皆を守る為に生まれたんだ。途中何があっても良い、今この瞬間さえもらえるなら、私は何にだって――

ずいと下から対戦車用ライフルがつきだされ、赤目の顔を照準した。

「――え？」

「ん？ 弾切れてないっすか？ てか武器の威力高い方がいいかと思つて、備え付けで一番ごっついのは持つてきたんですよ」

羽貫だった。自分が一瞬考えた恐ろしい思いを振り切つて「ありがとう」とお礼を言い、「でもその銃だとココで構えられないから」と断つた。すると羽貫が「じゃあ代わりにコレをどうぞ」アタレと彫られた旧世代用の弾丸を手渡してきた。

「おまじないですよ。敵に当たれつて。まあ、空気抵抗が変わつたりしてマイナス面しかないんですけど、お守り代わりにどうぞ。ココまできて死なないように気を付けて」

茶化して笑つた羽貫は車両の中に戻り、赤目は銃弾をポケットにしまいながらまた狙いを定める。

人肌に温かい銃弾だったと思い、目から流れる雫を手で拭きながら撃つ。

訓練で死んでいった子供を想い、嗚咽を噛み殺そうと苦勞しながら撃つ。

――誰かに死なないで欲しいつて、初めて言われた。

「……え、……ひつ」

漏れる音。

溢れる思い。

流してきた血と涙。

それら全てを力に変えて、誰かを守る為に撃てる喜び。多分、普通に生きてきた人には理解の出来ない、喜び。

決戦 六（後書き）

戦闘終了。

ごめん、魔法少女にするタイミングがココまで掴めなかった……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4574z/>

8-

2012年1月5日21時49分発行